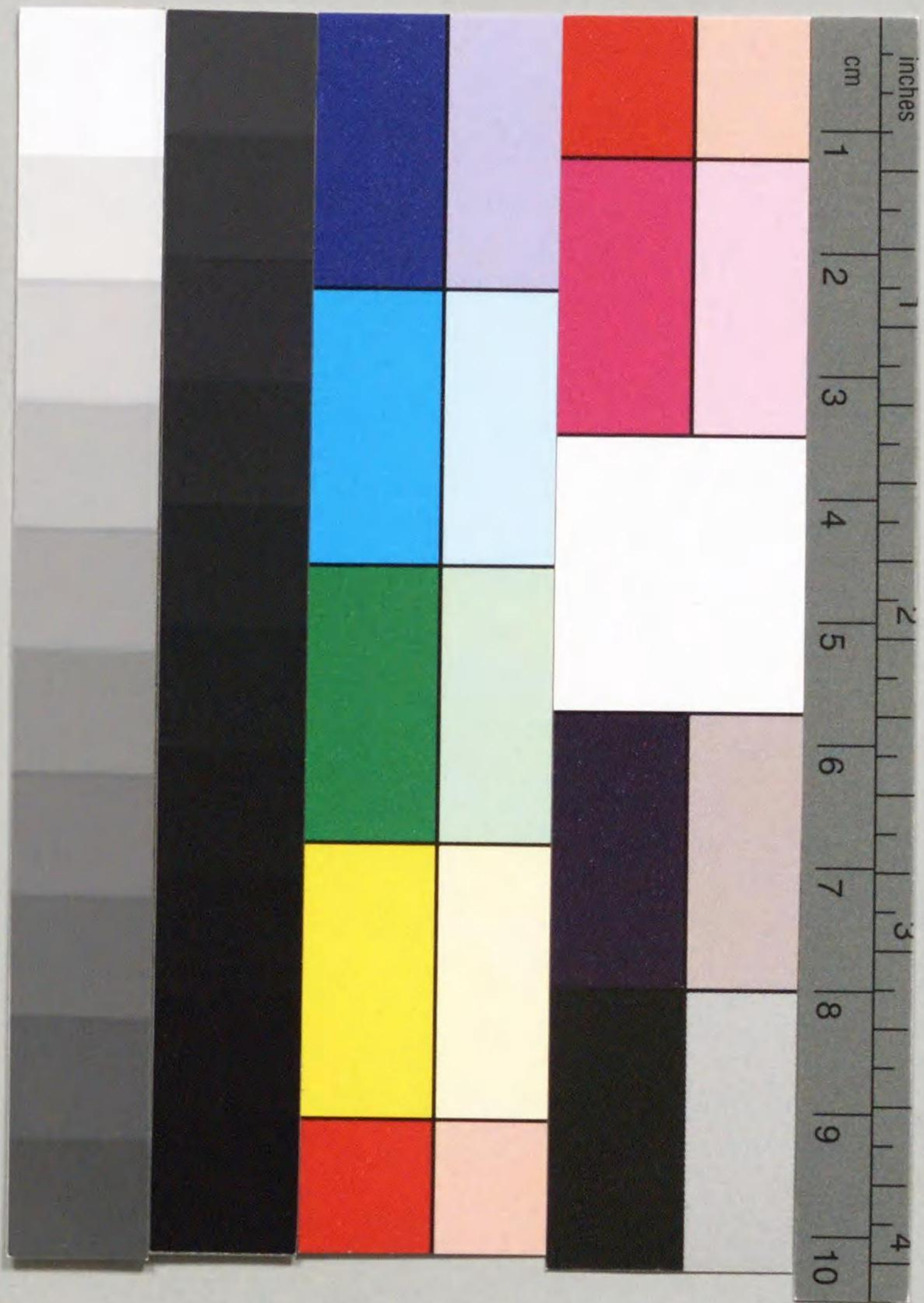




浪の著

花のしらべ





395





上海圖書館藏





48  
1182



80W19838

### はしがき

小説の主人公がいたづらものか、筆を執りし  
著者がいたづらものか、いたづらの正體いつ  
れにありや、いたづらの差別あまりに不分明  
なりといふものあらば、そいつがいたづらも  
のゝ本人なり、はしがき依而如件、

な  
み  
ろ  
く



出塵羅漢遠佛地

一入淫坊發大智

深笑文珠唱楞嚴

失却少年風流事



いたづらもの

浪 六 著

前 編

其 一

もし簡潔と達意とを以て文章の極とすれば、一字一點の無意味ならざる電報用紙の文字は正に天下の名文なり、もし新聞紙上に空文徒辭ならざるものを求めれば、堂々たる論説よりも寧ろ職業案内の三行廣告に人事直接の利害多し、都下の紙聞紙中、最も有力なる五新聞を選びて、その人事欄の一節に左の三行



廣告を掲げしものあり、

未亡人年二十五財産整理上誠實懇切の相談人を  
求む晝間三食を供し必要實費の外に月酬四十圓  
本人來談○豊多摩郡淀橋町角筈一二三山村キタ

自己の五體を仇敵の如くコキ使うて稼げども貧乏神に追ひぬかるゝ生活難の今日、自己の人相が變るほど、目を剝いて走り歩けど筈一本も拾へぬ就職難の今日、この三行廣告は社會の競争激烈に呆れて口を開いたものゝため思はぬ不意に落ち來る棚の牡丹餅なり、  
財産の整理上といへば整理すべき財産のある證據にして、素寒貪の筈なく、殊更ら晝間の二字に夜の宿泊を許さぬ點は却つて奥床しく、朝夕ともに三度お手

料理の御馳走を戴き、必要の實費以外に月々四十圓の報酬、これで勿體なや年が二十五の未亡人、たとひ不具者でも辛抱の出來るところを、もし花の香まだ失せぬ十人並以上の美人ならばと、その日の新聞紙上に於ける國家の一大事よりも二號活字の殺人罪よりも、猶更ら目を皿にして見遁さぬ世の中、  
いかに淺ましくともいかに馬鹿馬鹿しくとも今日これが或一部に實際の人情、親兄弟の病氣さへ尻が重くて容易に立上らぬ奴まで、本人來談の四字を見るや否、朝湯へ飛び込み理髪店へ駆け込み、中には俄の質受け、人だのみの借着にあらむかぎりの満艦飾を施して、さまざまの階級、いろくの人間、いづれも淀橋の方面へ先登第一の勢ひ、色と慾とに我劣らじと押出したり押出したり、新宿行の電車は悉く満員満員、  
生きた人間を荷物扱ひに詰め込まれて、一個の吊革に三四人も鈴生りの混亂雜踏、互に言はず語らず黙つて唾の如く睨み合へばこそ無事なれど、もし一時に



今日の目的を打明けば色慾二道の亡者満載、忽ち掴み合の大喧嘩なり、  
 時は用の多い空の寒い冬枯の十二月、堀の内お祖師様の會式は過ぎたり、加之  
 も日曜でなく祭日でなく、梅には早し小金井の櫻は猶更ら大久保の躑躅は霜に  
 根を閉ぢらるゝ此時節を、今日に限りて新宿の終點へ俄の混雜、はゝア今朝の  
 新聞、あの一件で押寄せる客かと、忙しき車掌も運轉手も思はず相顧みて内々  
 の苦笑ひ、

それと知りて見れば見るほど、いよゝゝ以て呵しく面白し、いづれも懐手のま  
 ま美味いものを食うて仕事をせず樂に世を送りたいといふ蟲の善すぎた人間ば  
 かり、多くは當世流のハイカラ自慢にコスメチックと香水の匂ひ紛々たるのみ  
 か動もすれば薄化粧も仕兼ねまじき男、或は正體の得知れぬ風俗に天ぶらの金  
 鎖を捻くりながら妙に澄まし込んだ薄ッぺらな奴、乃至また財産の整理上とい  
 ふ點より八字髭の眼鏡越に三百的の法律臭い奴、中には五十の坂を越して半白

の仔細らしき腕を組みながら眞面目な顔した老爺あり、大道の土方としても立  
 派に一人前の骨格を備へながら働かずに寢て居たいらしい面相の男、ちよいと  
 氣が利いたやうで儲よく見れば何處やらに間のぬけた男、もし官吏ならば今日  
 の缺勤届を出して來た不料簡の腰辨その月給は必ず四十圓以下なるべし、もし  
 會社員ならば輕薄の猪口才子にして色男の内職とでも心得た奴なるべし、その  
 他は一見いづれも所謂今日の墮落生と稱せらるゝ奴に相違なく、どの電車に  
 も、どの電車にも、

一日一回か僅一圓か一圓五十錢にして加之も都下幾十社の中ただ五新聞に掲げ  
 し三行の廣告が、世間あらゆる階級の亡者どもを吸集して新宿の終點に吐き出  
 さるゝ雜踏、互に見合はす顔と顔の恥かしくもなく斯の如し、つまりは女と金  
 のため、



いかに廣き東京も、これほど一時に電車より吐き出さるゝ人間、ぞろ／＼と新宿の終點より鐵道の踏切を越えて、淀橋の方面へ落ち込み落ち合ふ中には、見ず知らずの他人ばかりでなく、はつと驚いて脇道へ首尾よく遁げ去る奴もあれど馴れぬ道路に狼狽へて遁げ損ひし奴と奴との鉢合せ、今更ら雙方より退くに退かれぬ立往生と立往生、互に妙な面しながらも其まゝの無言では猶更ら妙な工合に口より出まかせ、

「やア君、どこへ」

「僕よりも君は全體、どこへ行くんのだ、寢坊のくせに、この朝ツばらから」  
「なアに、ちよいとね、四谷の大木戸まで用があつて來たんだが、どういふもんか今朝の電車ア馬鹿に混合ツてさ、おまけに運わるく中央でプランコと來たから出るには出られず、つい終點まで運ばれて仕舞ツた、はゝゝゝ」  
「そいつア困つたね、やはり僕も同じ目に逢つて來たが、時に君、巢鴨は、

これから、どの道を、どう行けば可い」

「巢鴨、とんでもない巢鴨は君、大變な方角違ひだよ」

「いや、巢鴨でなかつた、大塚でもない原、原宿の代々木だ、代々木だ」

「原宿の代々木は呵しい、原宿と代々木も違ツてるが、まア續いてるとしてたしか此の、踏切を越えて左の方へ行くんだけ、右の方へ行けば淀橋か柏木になるからねエ、僕は柏木に用がある、これで失敬するよ」

「ちよ、ちよいと待ツた君、今、君は大木戸に用があつて來たといふちやアないか」

「何、どうせ通り越したから大木戸の用は歸途にするよ、幸ひ柏木に久しく逢はない友達が居るからね、コンな時に訪ねてやろうと思ツてさ」

「ちやア君これで別れよう、代々木は此方だね、君の大木戸と違ツて歸途に用の足せないところだから困るよ」



一方は彼奴あゝ吐せど、もしや我背後を躡けて來るかど振返り、一方は彼奴の影さへ見えぬやうになればど振返り、互に思はず雙方より振返るや否、はつと再び面くらひの體、

「やア失敬」

「やア失敬」

いづれ同じ心で同じ道へ押寄せる奴、平生の類を以て友とするものに此失敬連中なか／＼尠からず、甚だしきは品川と淺草へ別れて出た筈の親子が不意の對面に驚き、互に拔駈けの兄弟ここに落ち合うて無言の目と目を白黒にする奴あり、まさか彼人がと思はるゝ案外の醜態、わざと拵へても出來ぬ自然の滑稽、みぐるしき露見の失敗、ごまかせぬ眼前の不面目、これで此中に國家の干城たるべき豫備後備さては現役に近き壯丁あるかと思へば、いかにも心細し、但し色と慾どに押が強く太い野郎共と思へば、猶更ら情なし、

淀橋の角筈百二十三番地の山村きた、これが先登第一を争ふ今日の目的物、その百二十三番地に最も近くして幸ひの目當となるべき百二十番地は味噌醬油の片手の小賣酒屋、店頭の中小僧おもはず眉を顰めて主人の老爺を振返りぬ、

「旦那、今日は何です、そろ／＼と續いて不思議に人が出ますな」

「さア何だらう、乃公も今朝から變に思ッてるよ」

「出るばかりぢやアありませんせ、よく見ると同じ人間が幾度となく此前を往ツたり來たりしてさ、おまけに薄氣味わるく妙な面で、じろ／＼自店の表札を覗き込みますせ」

「はてね」

「あゝあれ、旦那あれだ、あの向う側を澄まして通る金縁眼鏡の嫌に色の生



白い瘦ッてけた人と、その後から八字髭を生した洋服の赤靴で、ひよろ  
く背の高いハイカラね、あの二人は七八度も旦那、うろついていますよ、まさ  
か今日は精神病院の遠足ぢやアありますまいな」

「馬鹿ア言へ、精神病院の遠足會を追ッ放しにやられて堪るもんか、うか  
く出喰はした奴が災難だ、ははは、しかし變だな、おかしいね」

酒屋の老爺、首を捻りながら、忙しくて讀み後れし今朝の新聞を取上げ、何心  
なく見る例の三行廣告に、思はず膝を叩いて我を忘れし獨言、

「は、ア、や、こいつア驚いた、こりやア驚いた、これだな、これで分ッた  
どこの何者か知らないが、悪戯も此處まで念入に資金をかけて工合するた  
ア、あまり洒落れ過ぎて酷い奴もあるもんだ」

折しも近所に心易い荒物屋の主人、此奴また親の敵でも見付け出したやうに慌  
て、新聞片手のまゝ飛び込み來りぬ、

「み、見ましたかい、はッはッはッ」

「見た見た、今氣が付いて驚きましたよ」

「驚きますなア、かういふ凄い術で罪の深い悪戯をする奴があるんですから  
なア、これほどの悪戯する奴ですから、どツかの影で笑ひながら見物して  
るかも知れませんせ」

「全くさ、しかし面白い世の中だ、どうです、この人出は、随分、いろんな  
人間が交ッて居ますぜ、昔から相變らず恐ろしいものア色と慾とですなア  
お互に十二年も若くて此處に住んで居なきやア、やはり御多分に漏れ  
ず、この同勢に加はりますかね、ははは、」

「まさか、はッはッはッ」

「ところで、これほど探しあぐんでる大勢の人間が言ひ合はしたやうに、一  
人として百二十三番地の山村キタといふ名前を露骨に聞くものゝないといこ



ろが、おかしい人情だ、来た事は来たが流石に何となく、きまりの悪いも  
ンと見えますなア、つまり百番地ぐらいから、段々に探し當てようとする  
心根が、いぢらしくてお氣の毒千萬だ、はゝゝゝ」

「どうでせう、面白いは面白いが、考へて見ると實ア、かはいさうだ、いッ  
そ人助けに今のうち店頭へ張紙でも仕てやツちやア、それには幸ひ、こゝ  
の百二十番地が落ち合ッて來る關所に當りますせ」

「どんだ關所に當ッたもんだ、しかし功德になりますなア、よろしい、書い  
て張出ませせう、よもや後で警察から叱言を食ふ事もあるまい」

百二十番地の酒屋の店頭、まがり角の軒下より半紙三枚繼ぎ合はして思ひ切ッ  
た老爺の惡筆、ベツたりと縦に十六字、

百二十三番地は家のない空地面に候

遠路わざわざ大切の用を缺いで、この寒空に我劣らじと押寄せし亡者ども、あ

ツと呆れて怒るに怒れず泣くに泣かれず、今更ら不足を持ち込む喧嘩敵手もな  
く、さりとて人には言はれぬ自業自得、まんと首尾よく一ぱい喰はされた馬  
鹿な面を曝しながら、流石に元の新宿終點へ逆戻りの電車満員を恥の上塗りど  
思ひしか、多くは其まゝ心にもない方角へ迂回して、ちりぐばらぐばら

其 二

職業案内の三行廣告を擔任せる五新聞の社員、例の淀橋一件より三日目の後  
夕飯かたぐ相會して談話的の評議、

「随分と人を馬鹿にして悪い洒落をする奴もあつたもんだね、どうせ賣物ど  
買物の相違だから無論、三行廣告は求むる方にも應ずる方にも必ず多少  
の掛引ある事は承知してるが、まさか君、あれほどの人間を草の生えた空



地へ引ッ張り込んで一ぱい食はすたア、誰れしも思はないせ、は、は、は、」  
 「なアに悪洒落は悪洒落だが、我々の方へは正當の代價を拂ッて掲載すべき  
 手續きに不都合のない以上、わざ／＼この寒いに新宿の果まで欺されて出  
 掛ける奴が自分の勝手に馬鹿を見たのさ、三度の飯を食ッて財産整理の雜  
 費以外に月々四十圓づゝの報酬を貰ッて、異によれば腕次第で今年二十五  
 の女主人が君、どうにかならうといふ、そんなウマい事が今日の世の中に  
 あるもんかね、しかし外に相談する人も頼りにする親類もないらしく見せ  
 て、未亡人としたところは考へたね、あれで二八の處女と來りやア最初か  
 らの嘘になッて仕舞ッて、いくら馬鹿でも淀橋くんだりまで、わざ／＼恥  
 を曝しに行く奴アないよ、は、は、は、」

「だが、寧ろ痛快だ、起きて居て働かずに年中そんな夢ばかり見てる奴のた  
 め、實に頂門の一針だ、中には親の意見よりも、ぎやふんとまゐつた奴が  
 あるだらうよ」

「そこまでは宜いとしたところで、今日の送ッて來た寫眞に至ッちやア、酷  
 いね、あまり残酷だ、どこに隠れて居て、どういふ工合に撮ッたもんか、  
 よほど機械も技術も揃ッてると思えて本職以上の鮮明に寫ッてるだけが却  
 ヲッて罪だよ、かはいそらに前の方の二三人は最も手際よく、はッきりと撮  
 られてさ、いゝ面の皮だ、これちやア君、あまり惡戯に念が入り過ぎて酷  
 い奴だせ、わづかの廣告料で、あれだけ面白く一ぱい食はした上また二は  
 い目の寫眞を無代で掲載しろとは、ぶら／＼しさ加減いかにも手嚴しい奴  
 ちやアないか、加之も寫眞へ添へて來た文句は、どうだい、本月五日淀橋  
 の角等へ色と慾とに釣り出だされし白癡の骨頂會、は、は、は、それには  
 相違ないが、うか／＼すると今度ア我我の方面へ惡戯しに來やアがるせ」  
 「あの遣り口といひ今日の寫眞を送ッて來た工合といひ、全く油斷の出來よ



い奴だ、たとひ君、寫真だけの面積を特別廣告の代價に見積って来たとしても、社會に對する徳義上と自衛的の體面上、無論、出せるもんかね、しかし面白い奴だ、全體、どういふ身分で、何者だらう、

折しも一人の探訪記者、この寒中に額の汗を拭いて飛び込み來りぬ、

「やア諸君、ごえらい獲物をして來た、淀橋一件の本人、わかたわかつた、山村キタといふ女は實際だ、實際あるよ、」

電氣作用に等しく一時に向き直れば、鬼の首を取った探訪先生、ますく得意満面の手柄顔、

「僕は今日、或材料を得るために本郷から駒込邊を飛び廻って、ついでに千駄木の朋友を訪ねたが、用も済んだし俾も弱ったし、ぶらく團子阪をテクで谷中の初音町へ脱けようとしたところで、實に意外だったね、例の淀橋一件を見付け出したよ、時に團子阪も交通機關に縁の遠い故か、段段と

近ごろは寂れて來たやうだね」

「おい君、團子阪の盛衰は、どうでも宜いさ、際どいところで焦慮すなよ」

「しかし僕まだ夕飯を食はないぜ」

「承知承知、我々が分擔で奢るからね」

「は、事後承諾は覺束ない諸君だから、まづ言質を取って置いて本問題に入るんだ、は、は、は、さて團子阪から谷中の初音町で、ふと何心なく見た表札が諸君、山村キタさ、え、たとひ同名異人にする職責上、こいつ其まゝ見遁せないぢやアないか、幸ひ其邊の八百屋と小問物屋で例の慣用手段を以てそれとなく聞いて見ると、いよゝ物らしい、年ごろ二十四五の女主人で、加之も頗る付の美人と來たね」

「謹聽 謹聽」

「妙なところで謹聽しなくつても宜い、黙って聞き給へ、よほど面白い種が



ありさうだよ、何でも二月ばかり前、麻布邊から引ッ越して來たらしい風  
 聞で、たしか家賃が二十八圓、土地が土地だから、なか／＼借家普請でな  
 く手の這入った庭付の引締った二階建築だ、無商賣の若後家にしては諸君  
 迎も貧弱な身分ぢやアないせ、但し藝者あがりの妾風でなく、これといふ  
 男の出入する様子もなくツて、おとなしい眞面目の初志素人といふこつた  
 無論、近處界限の大評判になつてるさうだが、さうだらうよ、十四五の小  
 婢と五十ぐらいの飯炊婆を使つて、あまり外へも出ず引籠り勝に、爪弾の  
 三味線でなく、をり／＼奥床しい琴の音が漏れるといふ静な暮らし向、そ  
 れが山村キタ、どう思ふ諸君、あの淀橋一件には全然さらに何の關係もな  
 い名前だけの暗合にしたところで別に一個の趣味深き好問題とすべき價値  
 は十分ある女だせ、しかも年輩といひ境遇といひ、もしあの三行廣告を  
 出すとすれば、いかにも出すやうに當筈つた本人だ、淀橋の角筈百二十三

番地は全く嘘で草の生えた空地だが、あたり花の色香を持腐りにして若  
 後家の山村キタは嘘のない正銘眞實、こりやア本人を知つてゐる奴の細工だ  
 ね、その名前と身分を惡戯の種にしたんだらう、兎も角も諸君、此ま／＼ぢ  
 やア置けまら

「置けるもんか、談話半分に聞いても確に近來の種だ、こいつア我々專有の  
 秘密問題として一番、うんと遣らうぢやないか、勢ひ例の惡戯者も正體を  
 顯はすか知れないよ」

「や、おもしろい、やるべし、やるべし、やらすンばあるべからず、大に遣  
 らう、きつと其外にも何か意外な堀出物があるらしいせ」

「たどひ堀出物がないにしろ、あまり腹の立たない目的物だ、は／＼」  
 「おい／＼まだ着手しない最初から、もう其氣を出して掛るやうぢやア無効  
 だよ、全體淀橋の馬鹿げた實況を手取る如く見て來たやうに委しく報告



したのは、この中の誰だ？」

「仲間の共詮議は無用無用」

どツと一時に笑ひ出しぬ、

其三

わづかに一圓二圓の日濟貸より人の生血を吸ひ上げて、今は凡そ百萬に近しと稱せられ、都下隨一の殘忍冷酷なる高利貸の親玉といへば、借りた事のないものまで名を聞いて慄ふ木戸幸四郎、ふしぎに木戸幸四郎の音はひとごころに通じ、世間これを鬼の幸四郎と呼び鬼幸といふ、鬼幸、ことし六十の阪を越えて百萬の財を積み上げながら、金利を考へ無用の雜費を恐れて、本所割下水の場末に一個月十二圓五十錢の借家住居、その家賃

さへ満足に納めし事なく、わざと喧嘩腰に引ッ張りぬいて常に絶へず三四個月を滞らせ、これが利息幾何と算盤珠を弾き出す老爺、煮ても焼くても食へぬ奴といふ諺あれど、この老爺は酸にしても鹽にしても骨を叩いても食へぬ奴、

こればかりは案外、どういふ間違で、この老爺が都下あらゆる二十幾種の新聞を取るかと思へば、天引二割乃至二割半で三月束縛の跳りを見込んだ外に、相次第で一個月づつ新聞の代價を拂はせ、その古新聞を目方に賣る時また秤り目を争うて一喧嘩すると聞いては、只これ啞然たるのみ、

さして今日は執達吏の役場にも用なく、わざ／＼出かけて責め立つる催促の相手もない或朝の事、鬼幸例の無代取り新聞を見れば、



木戸幸四郎儀急病にて死  
亡致候追て葬式は明日午  
後三時自宅出棺仕候

大正元年十月四日

嗣子 木戸幸太郎  
外 親戚友人一同

流石の鬼幸、あつと驚いて思はず飛び上り、慌て、其他の新聞を見れば、最も  
発行紙数の多き八新聞へ悉く同じ黒枠、さらに八新聞中二三の紙上には、これ

を幸ひ時に取ッて好材料の雑報に載せたり、

●鬼幸の頓死

有名なる高利貸にして世間より鬼幸といはるゝ例の木戸幸四郎も冥途の鬼  
の迎ひには叶はぬものと見えて竟に急病頓死を遂げたり多年冷酷の手段を  
以て蓄積せる彼の財産は動産不動産を合して實際五十萬を超過せりといふ  
生前に最も彼が悪辣を極めしは既に訴訟期限の切れし他人の古證文を二束  
三文に買集めて態と見る影もなきを食同様の姿となり殊更ら信用を大切に  
せる商家の店頭に最も客の多き時を考へ或は名譽を重んずる相手の玄關へ  
大聲あげて半泣の談判を試み若し巡查の説諭に逢へば地上に坐して物あは  
れに今昔の情を訴へ追へども去らず撓まず毎日毎日これを繰返されしもの  
十中の八九いづれも閉口して必ず三分一か乃至また五分の一とかを取られ  
ざるものなく彼の重なる財産は實に斯の如き手段を以て作り上げたるもの



なりとぞ蓋し高利貸連中の側より見れば正に立志傳中の一人なり、

さらぬも年齢の割合に膏ぎって皺もない眞黒な鬼幸、みる／＼顔面は赤漆の如く光り出して、俄に嚙み付くやうな大聲、

「お辰、お辰ッ」

いくらでも腕次第に遠慮なく先で取って食へといふ條件の下に通勤の手代はあれど、臺所ぐらいの用で内に居て三度の飯を食ふ下女を置くべき筈なく、お辰とは縁あつて連添ふ女房の名、知らぬものは備ひ婆と見る今年五十二三の洗濯着物に褌かけ、今更ら外へ嫁入も出来ず順に後から死ぬ覺悟なればこそ、

「驚愕しましたよ、何ですの」

「な、何ですぢやアない、この廣告を見る、この廣告を、太い野郎だ、さア何故あゝいふ野郎を産んだ」

「おや、また唐突に幸太郎のこつてすか」

「幸太郎の事も事に依りけりだ、あの不孝もの奴、いよ／＼乃公を殺して仁舞やアがった」

「あら、良人、どうか、なすつたよ」

「どうも、かうも、あるもんか、く、黒梓だ、この黒梓に入れたなア彼奴の業に違ひない」

「黒梓、ぢやア良人の死んだ廣告でも出したンですか」

「さうさ、けしからンにも言語道斷にも程度のあつた野郎だよ、うか／＼彼奴に中學を卒業させたのは乃公が生涯の過失で、執達吏の見習を仕るといへば、ろくでもない小理窟を捏ね廻して、否と吐すから懲戒的のため叩き出したもの、考へて見る、親なればこそ月々五圓づゝも送つてやるんだぞ、畜生それを身に泌みて有難いとも思はず、親の病氣平癒を祈つて神社



佛階へお百度を踏む世の中に、ぴちぴち生きて達者な親を死んだ廣告する奴があるかい」

「だって良人、いよ／＼幸太郎の業と極った證據も何も、まだ分らないぢやアありませんか、第一それに無代では出来ず金の入ることですもの、月々五圓づゝで逆も食へないから或會社の受附になつてるといふほどの息が、まして親の事を、いくら何でも良人、あんまり幸太郎を悪く見過ぎますよ」

「いや、よくない奴だ、乃公の子としては、とんでもない生れ損ひの悪い料簡を持つた奴だから、どういふ野心があつて、やつたかも知れない、やり兼ねない奴だよ、全體また月々五圓で食へないとは、お前、それが不可、そんな算盤を持つから彼奴ます／＼圖に乗つて親を馬鹿にするんだ、野郎も野郎だが、また新聞屋といふ奴、たのみも仕ないに附け加へて餘計な事

を書く奴等だよ、犬猫は魚類のアラで生きてゐるが、彼奴等ア生涯他人のアラを舐つて生きてるんだな」

「おや、新聞屋も何か書きましたか」

「年が年中、びい／＼素寒貧で米屋や酒屋に恥ばかり搔いてるから、かきついで悪達者に他人の事まで思ひ切つて書きやがアるのさ、よし／＼、この腹いせに、どツかの新聞屋へペテン金を貸付けて、ぎゆう／＼息の根の止るほど窘めぬいてやらう」

鬼幸、めき／＼と角を立て、八當りに當り散らす折しも、門口へ綱ツ曳の俣、はや飛び込み來りしは今年二十三、案外に憎氣のない顔した幸太郎、生きた老爺を見るや否、茫然と呆れたままの立往生、

「や、此奴、歸つて來やアがッたな」

「お父さん、無事ですか」



「何、無事ですか、ふざけた奴だ、無事でなうて、どうするい、お前、黙ッてろ、さア野郎、今日の廣告、何のために出した、返答次第で、汝こそ無事に置かないぞ」

「こりやア驚きましたな、全く驚いた、へエ」

「何が、へエだ」

「何がッて、お父さん、外の事と違ひますから、實は今朝の新聞で、青くなッて飛ンで來ましたよ」

「ふう、ちやア汝の業ぢやアないのか」

「あるか、ないか、いくら何でも親子ですもの、考へて下さい、青くなッて飛ンで來ずに居られますかね、まだ胸が、この通りです、ごさくしてますよ、しかし、お父さん、ごこの誰が悪戯したか知りませんが、なさけないこッてすなア、こりやア淺薄な尋常の悪戯ぢやアありませんせ、何等か

其間に深い意味がありさうに思はれますよ、お父さんは全體これに對していかなる感じが起りました」

「もう宜い、汝でさへ無きやアそれで宜い、いくら世話をかけても世話料を取りに來ない警察へ訴へて詮議さす外に感じも返辭もあるもんか、ぐづぐづいふに及ばない、生意氣な奴だ、早く出て行け、用があッて呼びに遣る外、當分まだ歸る事ならないぞ」

現在の妻も子も呆れ返る老爺、あかの他人が金を借りて強慾非道に呆れ返る筈なり、

いかなる凄手の中へも入らぬ鬼幸を唐突に不意の黒棒へ叩き込んだ悪戯者はしよ／＼淀橋一件の悪戯者に相違なしと、新聞社に於ける評議一決、



更に悪戯の程度を加へて段々と圖に乗り調子づくのみか、例の寫眞を握り潰して載せざれば、勢ひ我々より進んで自然に筆を執るべき鬼幸の如きを種にせる工合、ますます油斷のならぬ奴なれど、その槍玉にあげらるゝもの必ず社會に有害無益なる點を見れば、これに要する金の不自由なく、おもしろ半分の道樂に世の中の諷刺的を以て快とせる人間なるべしと、また殆ど衆口一致、されど用心しながら結局は新聞社も一ぱい食はされ、よくの情實に免れ難き依頼さへ五六行以上を出でざるに、びち／＼生きてる奴を死んだものとして實際あれほどの長い雜報欄を首尾よく熱心に書かされたりと、かの團子阪より谷中へ行く道の山村キタは、これがため猶更ら以て急に激しき競争探訪の的となりぬ

危き浮世の綱渡り幾度か冷汗を流しながら、四苦八苦の借金政略を以て無理に紳士めいた三四人

「どういふ奴だらう、わざ／＼金をかりて悪戯も悪戯、あの黒枠で糠喜びの祝盃を舉げたものは我々ばかりぢやアあるまい、満都いたるところに随分あつたらうせ」

「さうとも、外の事と違つて、まさか鬼幸あの黒枠の外で無事に生きて居るとは、誰しも思はないよ、加之も御丁寧に長い雜報まで載つて居たんだがらねエ」

「しかし其後、新聞に取消の出ないのが不思議だね、無論、一文だつて自分から錢の出る取消廣告する奴ぢやアないが、生きて居て死んだと書かれた以上、正當に取消を要求しさうなものだね」

「なアに、いくら取消して來ても相手が彼奴だもの、新聞社の方で急に應じ



ないのさ、つまり立派に死亡廣告の出たのを盾に取って、いち／＼その死亡者を取調べる責任も必要もないといふだらうし、また彼奴は彼奴で現在の生面を持ち出すだらうし、どうせ君、こりやア新聞社と彼奴との面白い喧嘩が始まるよ」

「いくらでも勝手に新聞と喧嘩するは宜いが、取消文の出ないため鬼幸め、死んで居ないといふ證據の顔見せ旁、關係のあるところを廻り歩いて、ついでに手厳しい催促しやアがるのが第一に迷惑だ、僕の方は前夜、十時を過ぎてから不意に襲ひ込まれてね、いやはや、妻が産後で寝てるし弟が俄の熱病で取込の眞最中、酷い目に逢ったよ」

「そりやア困ったらう、だが他事でない、どうせ近々に僕の方へも遣つて来るよ」

「逆も遁れないかねエ」

「遁れたくツても先で遁さないよ」

「度胸を据えて覺悟するより外なした、しかし新聞に載った通り彼奴の財産は實際五十萬以上ださうだね、よくまアあれまで残酷に人を泣かして來たもんだ、加之も相續者は廣告に出た幸太郎といふ忤が一人で彼奴は六十三か四とすりやア全體あの金を、どうする心算だらう、何のために彼奴まだ鬼といはれて強慾を働くんだらう」

「は／＼／＼そんな世間普通の常識を持つてるもんかね、彼奴の心理状態を常識で判談しちやア無効だよ、つまり人間の出來工合が間違つてるんだからね」

「間違つた奴が金を持って、間違はない奴が常に貧乏とは、これまた社會人生の大間違ひだね、は／＼／＼」

「いや、をり／＼は少々づゝ悪くいはれても宜いから間違つて見たいもんだ」



あまり長らく正直に間違はなくツて、終始一貫の窮亡には實に飽きて仕舞  
ツたよ、はゝゝゝ」

鬼幸、議論も喧嘩も自己より上手の新聞社へ取消の催促は後へ廻し、いかに手  
敷をかけても手数料の入らぬ警察へは遠慮なく吐鳴り込みぬ、  
實は毀損さるゝ名譽もない人間なれど、まづ名譽毀損の部に入れて鬼幸を被害  
者とすれば、其まゝに捨てゝも置かれず、さまざまに取調べし結果、新聞社の  
受付と廣告掛の記憶によれば、年齢三十前後の會社員らしく、スコツチの鳥  
打帽に鼠羅紗のインパネス、鼻下に漆の如き八字髭ありて、第一の特徴は金の  
義齒二枚を真正面に光らせ、右の眼を病みしガーゼの上より黒眼鏡をかけた男  
さも忙はしげに本人の親戚と稱し、例の廣告文に即座の廣告料を支拂うて立去

れりとの事、  
鼻下の八字髭より漏れて光る前歯二枚の金と右の眼のガーゼと黒眼鏡とは、こ  
の悪戯者を探し出だすに最も有力なる證據となりぬ、  
たとひ右眼のガーゼを取り黒眼鏡を外すとも、自慢らしき八字髭と前歯二枚の  
金色とは、ちよいと取外しのならぬものなり、

其 四

女を秘密の鍵といへる諺は、正しく例の山村キタにありと、まづ第一番に襲ひ  
込みしは、各社前後の闇取を排して、これを最初に見付出だせし探訪記者、  
もしや人知れず外套深く通ふ男でもあるかと、やうく夜の明けし頃より霜  
を踏んで四邊を窺ひしが、假寝の雀二三羽、庭樹を放れて飛び去りし外、さら



に何の影なく、階下は六時前に起きて、二階の戸を開けしは七時過ぎ、八時の後を朝飯に置いて九時を覗ひ、

「たのみます、たのみます」

十五六の小婢、これも山出しの下女でなく、いはゆる小間使ひに見苦しからぬ相應の目鼻立、

「甚だ突然ですがね、この名刺のモンです、ちよいと伺ひたいことがあつて」

じろく額越に不審の目を敬てながら其まゝ二階へ急ぎ足に消へしが、引返して俄の丁重さは、どこでも食ひつけて常に馴れたる豫期の敬遠策、

「どういふ御用か存じませんが、實は二三日以前から少々、風邪で、はい、もし私が承りまして」

「いや、直接お目にかゝらないと、なアに決して、御迷惑になるこつちやア

ありませんからね」

「はい、ですが」

「もし只今お差支があれば、幾度でも伺ひます、御氣分が悪けりやア、また出直ませう」

「ちよいと貴君、お待ち下さるゝも一度、きいてまいりますから」

「逢へば、わかります、いはゆる新聞屋の種取ちやアありませんよ、はゝゝ」

居座を取方付けしが、凡そ五六分の後、

「お待たせ致しました、甚だ失禮で御座いますが、どうか、お二階へ」

しめた、もはや術の中にとありと、思はず片頬の微笑、案内せられし二階は、三疊の次に八疊の座敷、別に襖越の一室ありて、これが平生の居室らしく、他に飾らぬ總ての手廻り調度、もし其まゝとすれば、月を隠せし村雲、本人を見る



に唯一の参考を閉ぢられたり、

座敷の床には硯青磁の香爐、無落款なれど怪しからぬ古畫の山水一軸、片隅に銀の二枚折も時代めて白く光らず、その下に團紋の露はれし唐物の器局あるのみ、加之も掃除は行届いて一切その他に何の粧飾物なきは、まだ三十以下の世間普通に育ちし女として迎も及ばざるところ、身に不自由なければ猶更ら出来ぬ筈、使ひ馴れし桐の丸火鉢に、けばくしからぬ絹座蒲團、いやな菓子も進めず、まづ小婢に運ばせし番茶の馨り、いよいよ尋常物でなし、襖越の衣摺れ、その襖を開けて出るかと思へば、客座の下手より入り来る疊觸り音もなし、

「大變お待ちせ申し上げまして、山村キタで御座います」

身を捻ぢて一目、わけて女には電光の如き猶更ら早き無遠慮の批評眼も、實は一種の光りに射返されたる心地、後で思へば残念なれど、おもはず我を忘れて

座蒲團を迂りぬ、

「さア此方へ、甚だ高上りして居ります」

「どうか、其まゝに」

そツと軽く伏目勝に會釋の束髪も、電車の乗合で幅を取る銅の蓋でなく、あり餘る自然の黒髪、ふツくりとして生際に青味を帯び、白粉氣のない肉色の冴えたる顔に聊か太き眉毛を其まゝに作らぬは却つて賤しからず、いき／＼と張り切りし目許に態とらしき秋波の媚なく、鼻筋より口許の引締りしところに氣高き品位を添へて、いはゆる丸ぼちやの愛嬌に氣輕の女とは元來その天生を殊にせる正反對の美人、

もし水死と轢死の女を以て悉く美人とする新聞記者の筆法より論すれば、正に是れ遺憾なき曲線の美を理想的に組み立てたるもの、小荒き大島紬の綿入羽織に京お召の立縞も不斷の常着らしき風情、これで男なしの未亡人とは寧ろ悲惨



の曲なり、まして花の香こ、を生命の今年二十四五といふに至っては、今日の世間に實際あるべき筈のない本人と眼前の對坐に流石の探訪先生、暫し無言のままぼつとせり、

「御名刺を拜見いたしましたのが、かやうな見苦しいところへ、わざわざ、どういふ御用で」

「いや、別段、大した事でもありませんが、さやう、今日より十日以前ですな、本月の五日、四五の新聞へ何か廣告をなすつた事は、御坐いませんかつまり職業案内の部へ求むる方で、いはゆる三行廣告を」

「ほゝ、どう致しまして、さやうな、廣々などを」

「はゝア、では御氣も付かなかつたと見えますな」

ポケットより其日の五新聞を取出だしぬ、

「その朱點の付けてあるところを、よく御覽下ささ」

まづ其中の一枚を審し氣に取上げて、不安の目許に見るや否、はツと思はず顔を赤めし驚愕、驚けば猶更ら天生の美しいよく美なり、

「あらッ、まア」

「いかゞです、土地は違つて居ますが、立派に貴女の、お名前でせう、お年ごろといひ、その他の點も、こうして伺つた御様子から、もし萬々一、ありとすれば、ありさうに思へるぢやア御坐いませんか」

さらぬも引締りし下唇を嚙んで、はや目に持つ口惜涙、聲まで打震ひぬ、

「御社の新聞と、外に二三種、絶えず拜見は致して居りますが、大きい、目立つた廣告でさへ、あまり、それに、かやうな廣告は第一まア酷い事を」

「實際、御存じないとすれば、意外の御迷惑で、とんだ御災難ですなア」

「別に世間へ、名の知れた身分でも御坐いませんが、十日も、以前の事とすれば、もう、取消の出来ないもので御坐いませうか」



「なアに、それにはまた、いくら時期が後れても、いろ／＼と有効な取消の方法はあります、ありますよ、しかしですな、こりやア必ず、きつと貴女を知つて居るものが、何等か、ためにするところあつて、かういふ廣告を出した、とより思へませぬね、何か、お心當りは、ありませんか」

「かやうな不束なもので御坐いますから、どうせ、他人様の、お氣に觸る事も、あるかと存じますが、まさか、かういふ廣告を出されるやうな、覺えは、少しも」

「いや、貴女の方は更に覺えがなくつても、世間には随分此方の知らない事で、自分の勝手に無理な怨恨を抱いたり、また、つまらない不平を起したりする奴があつて、いはゆる犬糞的の復讐を仕かねない、けしからん悪戯者のあるモンですからなア、わけて貴女のやうな境遇と容貌は、さういふ馬鹿者を生じ易く出來て居ますよ、は／＼、戲談でなく實際、今後とも御

用心なさらないといけませんね、時に貴女のお知合で、いや、さう深いお知合でなくとも前齒に二枚、金の義齒した男の人は御坐いませんか」

「男の方は、親戚の外、あまり存じませぬから、金の義齒、前齒に二枚も、いゝえ、さういふ方は」

「は、ア、ちやア常に黒い眼鏡をかけて、また近ごろは右の眼でも煩つて年輩三十ぐらゐの八字髭のある人を、決して御迷惑になりませぬ、實は貴女よりも寧ろ新聞社の體面として、伺ひたい事があるんです」

「黒い眼鏡をかけた人、いつかう存じませぬ、お髭の方は御坐いますが、それも半分以上は白くなつて、第一お年が違ひます、もう五十を過ぎて居らつしやいますから」

「なるほど、ちやア一切お心當りはありませんね、實は警察も新聞社の方でも多少の根據あつて、さういふ人間に疑ひを掛けて居るんです、つまり貴



女のためにも許すべからざる奴だ、しかし名を出された本人の貴女に少しも心當りがないとすれば、さらに別の方面から、また或手段を以て、なアに其うちには、御覽なさい、さつと分りますよ」

「何のためか存じませんが、ほんとうに、ひどい人もあるもんで御坐いますねエ」

「は、もし悪戯者とすれば、よほど考へて念の入った悪戯者ですよ、時に貴女ア、さつと以前から、こゝに御住居ですか」

「いえ、つい二月ほど前からで御坐います」

「それまで、どこに御在住でした」

「麻布の、廣尾に居りまして」

「別段、御商賣もなく、只お一人で」

「は、いろいろの、事情が御坐いまして、致し方なく、この年になるまで

一人で居ります」

「ちやア最初から、お一人ですか、例の廣告に未亡人とあつたのは、間違ひです、無論、大體に間違つては居りますが、それにしても最初からお一人とは、殆ど信じられませんね、恐らく、こりやア誰だつて信じますまいよ、第一に世間の事實が許しませんからなア、は、は、は」

「ほ、眞實で御坐います、どういふ實例が世間に御坐いますか、少しも存じませんが、をり、皆様から同じ事ばかり承りして、いつも御返辭に固ります、何を致しても、女は弱いもので御坐いましてねエ」

「柔かく角立たずして、ピンと弾きし最後の一言に、もはや是以上を語らずと閉ぢし唇端、もはや是以上に立入るを許さざる眼色、たゞさへ弛みなき總ての美線を引緊めて、髯武者の大男が喝破するよりも猶更ら強き一種の力あり、

「いや、大變お邪魔いたしました、いづれまた伺ひませう、もし例の取消そ



の他に付いて御思慮でもあれば直接、社へ電話をかけて下さい、及ぶかぎり御便利を圖りますから」

「ありがとうございます、萬一御願ひ申すやうな事が御坐いました節は、何分とも」

「承知しました、しかし實際、とんだ御迷惑でしたなア、ああいふ悪戯をする奴は社會のため一日も早く捉へて、聊か酷でも實は相當以上の制裁を加ふべき必要がありますよ」

靴の紐を結びながら頻りに辭退せしが、門を出づるまで懇慫に手を支へて見送られし探訪先生、足早に五六間を歩みし時、おもはず振り返りて、山村キタの四字は本人を見ざる前の想像よりも本人に會ひし後の解釋ますます不思議の女となれり、

其 五

近來流行の女學雜誌中、最も多數の讀者を有する一雜誌の投書欄内を利用していかにも無遠慮に大膽に左の一文を掲げしものあり、半は嘲弄的、半は侮辱的されど事實は事實として雜誌社またこれを一種の懲戒的に掲載せり、加之も擔當記者これに附記していふ、この投書は尋常一般の投書にあらずして多大の勞力を費せるが如く、いち／＼その學校の受持教員も生徒の姓名年齢も實際の場所も時日中には驚くべきほど緻密に家庭の内容までも取調べて、其他に於ける總てをありのまゝ、最も露骨に最も明白に記載しあれど、あまりに深酷を極めしがため殊更に削除せるところ多しと、

或一部の女學生に對する予の實驗談

〇〇生



今日の女學生なるもの、いかに淺ましく墮落せしかといふ一の證據は、い  
ち／＼その局部を實際に検査せずとも他の種々なる方面より責任を帯びて  
斷定せる専門家の言によれば、恐るべし十中の八九は悉く子宮病者なりと  
いふ、いまだ男子に接せざる未婚の處女が殆ど子宮病者たる一事は、強ち  
女子の生理上に不適當なる體操の激烈なる結果のみにあらず、また學術上  
に堪へ難き過度の腦髓を使用せしむるためにもあらず、さらに天生の虛弱  
より來りて餘儀なく避け難き不幸の病症のみにあらずして、實は近來の最  
も寒心すべき同性の愛を行ひ或は人知れぬ不自然の淫猥行爲に基けるもの  
多し、これが教育者と父兄たるもの、さりとては餘りに油斷すぎたり、あ  
まりに、我生徒と我子を見るに甘き砂糖分を用る過ぎたり、親愛の上より  
多少の最眞目は許すべきも、この許すべからざる一大醜惡の猛烈なる勢ひ  
を以て殆ど傳染病の蔓延に等しきを奈何せむ、此まゝでは捨てて置けぬ事

何となさるゝ御量見ぞ、

さらに今日の女學生なるもの、そも／＼いかなる當面の急務ありて殊更に  
戀の神聖を叫ぶの必要ありや、この神聖連の裏面に於ける不神聖を證明す  
るに最も手近の實驗談を多く有せるものは予なり、予は始め世間より今日  
の女學生に對する聲を疑ひし結果、或は一種の警告的と豫防策の如く思ひ  
しが、これを實際に試みて世間の攻撃よりも寧ろ其實際の甚だしきに驚き  
其實際の大膽なるに呆れたり、

○女學校の終期生、年は二十一、容貌は校中の第一、家庭は名譽ある紳  
士の長女、品行の方正と學術の優等を以て常に他の模範とせらるゝもの、  
これに對して頗る残酷なれど、勇を鼓して最初まづ其生徒に一矢を放てり  
つまり戀愛小説を唯一の虎の巻とせる青書生の常套手段を以て竊に三通の  
艶書を個々別々の三様に送りし時は、その艶書を三通とも父兄に示し教員



に示して品行方正の名ます〜高くなりしが、數日の後、或青年俳優の素顔を撮れる寫眞に多少の筆を加へて復寫せしものを封入し、これに最も巧みなる文意を添へて誘ひ出せし時は、靈現顯著、忽ち效能ありて日も時も違はず日比谷公園の指定せる場處へ本人、のこ〜と御來臨あらせられたり加之も前後に憚る色なく顔も赤めず我にも恥ぢず人にも恐れず、宛ら孔雀の羽を擴げしが如くに盛粧を誇りて晴れがましく出で來れり、出で來りて其邊を徘徊すること凡そ二時間餘、日でも取違へたと思ひしものか、翌日また同じ時刻に來り翌々日また來りて三日間の御苦勞千萬、流石の四日目は姿を見せざれど、其後をり〜絶えず來りて何とやら去るに忍びざる風情、聊か罪な事をして過ぎて哀れに氣の毒ながら、全校の模範として内外より品行方正の保證を與へられつゝあるものさへ、事實は斯の如し、危い哉、危い哉、もし色魔ありて彼を掌中に翻弄せむとすれば、これを煮て食

ふも焼いて食ふも自由自在なり、

また〇〇女學校の四年生、年は十九にして平生の態度は殆ど男子に等しく常に自ら女子に生れたるを、人生の最大不幸と叫び、生涯の獨身生活を標榜して大に婦人の薄弱と墮落を憤慨せるもの、予の好奇心これに向ふて第二の矢を放てり、通學の電車中、混雜に紛れて袂へ投げ込みし艶書に一定の同乗時刻を定めて三十回の乗車券を封入し、この往復十五日間には必ず何等か別の秘密方法を以て更に具體的の意を通ずべしと約せしが、怒ろしや、恐ろしや、その翌日から彼の態度は一變して俄に女らしくなれり、お化の如く亂れし束髪も艶々しく搔き上げて、まさか急に白粉も塗り得ざれど、ろくでもない面を磨き立て、赤黒くテカテカと光らし、着物も袴も下駄までも舊態を存せず、太き猪首を無理に引伸し怒れる兩の肩を萎めて一種異様の目に電車中の若き男を見廻す體、よほど珍にして奇なるのみか、



約束の日限も將に盡きむとせし十三日目、そつと降り際の混雑に再び一書を投げ入れて曰く、容貌の缺點を補ふべきため餘義なく學問せる卿の不幸に同情し、こゝに謹んで三十回分の通學料を助けし所以なりと、その翌日より此女學生を同じ電車中に見ざりしが、或雑誌の寄書中に一女生として掲げしものあり、づうづうしく年氣で澄まし込んで曰く、あはれむべし、今日の男子が女子に對する戀は三十回の電車賃を以て醜猥なる目的を達すべきものと思へり、現に妻が送られたる艶書中に三十回の電車券を封入せし痴漢ありて、これを直に警察に届け置きしが、男子の野卑陋劣も事こゝに至りては寧ろ女子に侮辱を受けたる念慮なくして只その滑稽を笑ふべきのみと、以上の事實談を以て讀者諸君は果して如何なる感想を起さるべきや、その電車券を警察に届けしといへど東京府下の各警察署いづれの方面にも斯る届出は斷じてなかるべし、實は警察どころか親兄弟にも見せず本

人これを嬉しく御使用あそばされたり、また折角の嬉しい團子鼻をヒン捻られた口惜し紛れに飛んでもない反對の復讐せし點は、今日或一部の女學生に恥といふものを知らざる鐵面皮の證據を遺憾なく露出せり、あたら學問せし十九の處女、もしこれを實際の手に入れむとすれば三十回分の電車賃一圓二十五錢にて、どうでもなる世の中とは、あまりに馬鹿げて安いのにあらずや、

また家庭の嚴格にして叨りに外出を許されざるものへは、友達の名を用ゐて公然と女學雜誌を郵送し、いち／＼その雑誌の冒頭より必要の活字に鉛筆の圈點を施し、圈點の附せし文字を順に綴りて讀ましむれば、凡そ百ペーシ内外の間に於て自由自在の艶書を作り得べく、この他あらゆる種類の手段と方法を以て、既に墮落せりと思ふものよりは寧ろ乗じ難きものを選びて、前後一年間に四十九人を試みしが、さらに應せず顧みざるものは僅



に六人、全數の一割強とは、いかにも心細くして、なさけなき結果ならずや、中には殊更に或待合を利用して、まさかと思ひの外、その待合へ恐れ氣もなく直接に乘込み來りし十八歳の女學生あり、また谷中の墓地に有名なる石碑を目標とし、艶書の返事は竹の皮に細く巻いて其石碑の横に埋めよとの注文に對し、わざ／＼白晝その碑を探し置いて深夜その約束を正直に履行せし二十歳の女學生あり、その最も一驚を喫せしは我國に於ける最高の教育をうけつゝある女學生にして未だ一面識もない返書に月々二十圓づゝの小遣を要求し來りし豪のものあり、以上の事實を以て、單に予の惡辣なる誘惑手段に出でしものとするは、既に大切の子女を過れる油斷大敵なり、いかに巧妙なる誘惑手段を盡くせるにせよ、世間の耳目より最も安心の保證を與へられたる四十九人に對して僅に六人の無事を保ち得たりとは、あまりに見苦しく女學生の薄弱を示し

過ぎて、寧ろ彼等は常に斯かる誘惑の來るを待ちつゝあるかと疑はしむるの恐あり、加之も予は或主義の下に試験的を以て行ひしがため、事實に於て一人の醜關係なきは勿論、いち／＼最後には必ず鐵槌を下せり、却つて彼等を慚愧後悔の間に救ひ得たるも墮落せしめし覺えなし、さらに予が部下の青年を餘所ながら監督の下に放ちて、公園の散歩に活動寫眞に演劇場裡に神社佛閣の祭日に其他の種々なる男女接近の混雜に乘じ殆ど常識以外の大膽なる行爲を敢てせしめしが、その常識以外の大膽も寧ろ彼等を驚かすに足らずして、その三分の一は音なく聲なき握手を得ること頗る容易なりしには、たゞ啞然として恐れ入るの外なし、予は斷じていふ、これが教育の任にあるもの家庭の保護者たるもの、今に於て警戒の道を講じ救済の方法を取らざれば、この勢ひを以て進むの結果殆ど二十歳前後の初婚者に實際の處女は稀にして、寧ろ偽らざる處女は常



に彼等の口より醜業婦と稱せらるゝ花柳界の雛妓に求むるの奇觀を呈すべし、つまり彼等は神聖なりといふ美名の下に案外の醜行を見遁さるゝの便利と隠蔽の容易なる危険ありて、これに反せし花柳の小妓は破瓜の價に千金を呼ぶがため却つて利益上に其監督の嚴重なればなり、婦人の生涯に最も尊重すべき處女の純潔を、いはゆる醜業婦の間に奪ひ去られむとするは、瓊玉を泥中に投するよりも惜しき業にして、いかにも殘念至極ならずや、いかにも恥辱の至りならずや、

これを掲げし雑誌の擔當記者が、あまりの深酷に或部分を削除してさへ、なほ今日の女學生に拭ふべからざる侮辱の極を加へしものと騒ぎ出し、學校の問題教員の憤慨、父兄の躍起、おのゝ協力一致に此毒舌家を種々の方面より物色せしが、雲を掴むと一般、さらに何の手應なし、

例の淀橋一件と鬼幸の死亡廣告に猶いまだ正體を捉へ得ざる新聞社の探訪先生いづれも互に聲を潛めながら、さアいよゝゝ手廣く增長して來やアがツたせ、どう考へても山村キタあれが怪しいわら、

其 六

たとひ山村キタといふ女を別に一個の問題としても、たしかに無用の徒勞に終らぬ筈と、上野の森に月寒き夜の九時ごろ、頻りに四邊を窺ふは三日以前に本人を襲ひし例の探訪記者、

戀に忍ぶ身ならねど、ふしぎに深き印章を刻み込まれし容貌、ありゝと目に浮びて、見れば二階の戸は既に閉ぢたり、されど寝るには早き時刻、花の色香の冬籠りに友もなき徒然の身を持て餘していかに何をするかと思へは、あれほどの美人が浮世の捨物に等しき境遇、いよ



く探るに趣味深し、

まだ十時にならぬ前、はや門口を閉める音がと思へば、あけて立出でしものあり、中折帽に和服外套の襟深き男の姿、

や、此奴、これく、かうなうては叶はぬ筈、まして今日の世の中、あゝいふ女の獨身者が小説以外の實際にあつて堪るものかと、ますく身を潜めて窺へば、樹間より雨曇りの朧月に光りしステッキの銀柄、其まゝ足早に急ぎもせず、悠悠と歩み行く後影は、大男でなく小男でなく所謂中肉中脊、口に咬へしシガーを吐き捨てし後より、其は境遇を知るに唯一の参考品、まだ消へぬ火を幸ひ拾うて見れば、富士にあらず敷島にあらず埃及の太き金口エムシー、倍は世間普通の男でなし、辻俤の聲にも顧みず、ぶらくくと初音町より團子阪を上りて、千駄木の右を駒込の白山前に出で、三田行の電車を待ち受けて乗り込みぬ、

此奴、見遁してなるものかと、同じ電車へ飛び乗り、斜に向ふて見直せば、帽子の下は五分刈らしく、色は浅黒けれど所謂垢ぬけのせし男色、美男ならねど目鼻立すつきりとして自然に品位を含みし三十前後、鼠ラクダの外套に艶々しき黒襦子の裏地、大島紬の二枚小袖に同じ綿入羽織、白足袋に桐柱の直履きその他の風俗態度より商人にあらず會社員にあらず官吏にあらず、五十回券を出だせしところは電車の常客なれど、白晝の要用には吊革にブラ下りて似合はしからぬ體、もしやと思ひし黒眼鏡もなく八字髭もなく前齒に光る二枚の金色もなし、

落付く先を聞き漏らせしため、神保町の乗替に切符一枚を損して、また新宿行へ飛び乗り、九段阪の上に降りて、市ヶ谷行に乗るかと思へば、其まゝ其道を招魂社に添うて左に折れ、三番町より中六番町と下六番町の境目を再び左に折れし黒の冠木門、はや十時を過ぎて閉ぢたれば、右の通用門をステッキの先に



押開けて内へ入りぬ、  
門前の電燈に表札を透し見れば、子爵松川廣道、

松川家は新華族でなく所謂大名華族の名門、加之も子爵中に一二を争ふ有福者、當主廣道は六十二歳の貴族院議員、長男廣行は帝國大學の法科出身にして今年三十一歳、次男の廣國は二十六歳にして陸軍中尉、妾腹の三男廣正は十六歳にして學習院にありといふ、この事實調査によれば、前夜の三十男は正しく長男の松川廣行、  
人知れず通ふ男を大名華族の長男とすれば、あれほどの美人あの境遇にあるも更に何の不思議なしと、始めて山村キタの半面に疑ひを解きしが、猶いまだ解けざる彼の前身と彼の將來に最も深き趣味あり、例の探訪先生いよく興に入

りて、そもこの戀より何物を産み出だすか、たゞ孕んで子を産み出だすだけでは面白からずとの勢ひ、その翌日の朝、俵を飛ばして直接に本人の松川廣行を襲ひ込みぬ、  
大名華族に新聞記者の名刺は禁物の第一、いふまでもなく二三度は玄關拂ひの覺悟、首尾よくて三太夫の代理と思ひの外、すぐに此方へと應接室へ導かれしは、聊か案外、  
舊式の玄關より長き廊下を傳ふて、右に新築の洋館、さのみ華美を盡さざれど應接所としては缺點のない總ての粧飾、茶菓を運ばれて待つこと十分餘、扉を排いて入來りしは果して前夜の男、當家の長男廣行、  
身輕の脊廣服に満面の愛嬌、さらに華族めいた風もなく、あくまで平民的に打解けて快活の態度、  
「やアお待たせしました、僕が松川廣行」



「始めてお目にかゝります、お取次に差上げました名刺のもので」

「拜見しました、僕は數年來の愛讀者です、しかし、ごういふ御用で、甚だ失敬ですが實は今、ちよいと他に約束があつて出かけるところですから、

なアに十分や二十分は、決して、かまひません」

前夜の電車に顔を見覚えし様子もなく、テーブルの上の函を開いて客に葉巻を進めながら、自分はポケットより別に金口のエムシー、その貰まで承知の探訪先生、

「あまり突然で、無論、御迷惑の點も御坐いませうが、常に絶へず時勢に要求せらるゝ我社の方針として、數日前から急に華族方を御訪問し始めました、つまり現在の御當主よりも將來の主人公たるべき長男の方ばかりを、或意味の上に於て」

「はゝア、或意味とは、ごういふ意味です」

「簡略に申し上げますと、新しい教育をうけられた方で、いはゆる殿様とか御前とかいふ意味でなく、今後いかなる態度で、いかなる感想を抱かるゝか、あらためて社會の進歩に伴はるゝ華族方を、御訪問いたしますので」

「なるほど、いや、わかりました、徒らに祖先の餘慶で何の爲す事もなく暖衣飽食する華族連中へ、警告の意味ですな、お前達は今後どうして社會のためになる料簡か、ぶらゝと只そのまゝぢやア働いても食ひ兼ねる人達に對うて申譯がなからう、相濟むまいといふ意味でせう」

「や、それほどには」

「なアに君、このくらい手厳しう切込まないと逆も無効だ、生れて衣食住の心配を知らない華族といふものは、自然の境遇上、或點は罪のない小兒と一般で、勢ひ他よりは刺激を受ける感じが薄くなつてゐるからね、はゝゝゝしかし面白い、どしゝ無遠慮に大に君、やり給へ、同族中から常に華族



らしくないといふ包圍攻撃で、殆ど一種の除外例を食ッてる僕の如きは、まさか公然と反旗も翻せないが、寧ろ喜んで内應するね、は、は、は、は、

「恐れ入ります、しかし實のところは、將來の華族として貴君のやうな方を我社の理想に致して居るんです、一高から帝大へかけて御秀才の名を得られた事も、十分、承知いたして伺った理由です」

「君、お世辭は止して貰はう、實際、あばれ者の名は取ったが秀才の名は他人に取られて仕舞った、まだ今いふ通り僕は殿様に頗る不似合の人間で、いはゞ家族へ生れ損って来た奴だから、お世辭に對して御褒美の出しやうも知らない、は、は、は、松川家も不運ですよ、もし優形の上品なものを拵へば宜いに、どう間違ったか、かういふ厄介な長男が出来ましてね」

圓轉滑脱として洒々落落たる中に、動もすれば人を翻弄するが如く、をりく意想外に出で、油斷のならぬ點は、いかにも世間普通の華族扱ひに出来ぬ相手

と、實は聊か癢に觸へし探訪先生、もはや會釋もなく眞正面より露骨の單刀直入、

「甚だ立入ッて、妙な事を伺ひますが、山村キタといふ御婦人を、御承知で御坐いますか」

この一太刀には流石に不意を打たれて、はッと驚き眼色を變へるかと思ひの外にやりと薄氣味わるく笑うて、椅子に反身の兩腕を組みしまゝ身も動かさず、

「あれは僕の妻です」

探訪先生、逆に不意打を喰ひし顔色、呆れて暫し無言の體を冷笑的に浴せかけ

「公然まだ此家へは妻として迎へませんが、松川廣行の生涯を契った最愛の妻です、不束者、どうして御存じですね、もし彼の事で何か、御迷惑でもあれば僕が責任を帯びますよ、また面白い種でもあつたとすれば、わざわざ



「別に取消も仕ませんから御遠慮なく、お書きなさい、はゝゝゝ」  
却つて受太刀となれる探訪先生、

「いや、何、決して、さういふ意味では御坐いません、たゞ過日、出ました  
廣告の一件で」

すぐに打解けて即坐の愛嬌振、

「あゝ君ですか、過日、あれを御訪ひ下さつたのは、それなら前夜、實は本  
人から聞きましたよ、随分と世の中には、いたづらの激しい、ふざけ方を  
する奴もあるモンですなア、はゝゝゝ」

「どんだ、御災難で」

「なアに、かまひませんさ、當分、口を得ざる都合上ですが、とかく疑ひ  
の問題になり易い女一人を、あゝして置く僕が悪いのです、あれの名を利  
用した悪戯者は別として、いはゆる警察眼や新聞眼には最も誤解を招くや

うな境遇に置いてありますからねエ」

「さうでもありませんが、あまり、目に立つ御容貌ですから自然」

「今度は君あれの方へ、お世辭ですかね、はゝゝゝしかし僕と違つて女は弱  
いもんだし第一また女の強味は風情を缺いで宜しくない、ぢやア近日あれ  
を弱らせて、あれの家で、どうです君、お忙しいでせうが、一度お飯でも  
食ひませうか、お馴染になれば是以上、また打解けた面白い談話も出來ま  
すよ」

「有難う御坐います、いづれ其うち改めて」

「あらためずに其うちでなく日を極めて、當家で宜しいから電話を通じて下  
さりやア、すぐに初音町まで出かけます、しかし考へて見ると油断のなら  
ぬ世の中だ、わるい人に見付けられましたなア、誰やらの狂歌にありまし  
たよ、ぬす人に見咎められて恥かしや夜な〜運ぶ戀の重荷を、はゝはゝ



もし昨夜の電車に君が乗り合はして居たンぢやアありませんか」  
最後に止めの一刀、ぶつりと刺されし記者先生、ぐらの音も出ず、其まゝ手持  
無沙汰に慌て、遁げ歸るを、玄關まで懇懇に送り出して、

「ぢやアこれで、御免くださる」

其 七

いづこにも華族を門の表札以外に持ち歩かぬ松川廣行、まして心を許せし我戀  
の隠れ家に入れば、猶更ら打解けて世間を放れし男なり  
人しれぬ二階の八疊、桐の大火鉢を前に引寄せて後の床柱に脊を寄せ、厚き座  
蒲團に胡坐の膝を埋めて葦の煙を吹きながら、黒樂に薄茶の大病を片手の一口  
二口、

「あら、貴君、まア、何といふ事で御坐います、ほゝゝゝお葦なり、御茶な  
り、どちらか一つに遊ばせよ、大變な御前様で困ります事ねエ」

通ふ身の嬉しきか、通はるゝ身の嬉しきか、待つ身、待たるゝ身、をりゝの  
逢ふ瀬に戀は猶更ら深し、

「かういふ殿様だから萬事、うけが悪くツて家風に合はソのだ、しかし茶と  
葦を一緒に遣ると兩方とも乙な味が出るせ、これで菓子を食へば、どうな  
る、妙な顔をせずと其方を向いて居れよ」

むしやくと菓子を取って頬張り、すつと薄茶の残る一口半、ぼつと葦の煙を  
一吹き、

「こりやア不可、やはり菓子は始めの一個に限る、あとの一個で茶も葦も味  
を失って、めちやくになつた、はゝゝゝおい、もう一服、口直した、こ  
く薄くしてくれ」



天生の容貌は美術家のモデルとしても競争の的にせらるべく、花は固より茶の心得は女宗匠としても恥しからぬ手前、流行唄さへ嫌はずば花柳の巷に突入れても第一流の名妓、これで生涯を埋木のまゝ譬ひ日蔭の身に終るとも夢さらさら何の不足なしとは、不足いはさぬだけの人あるにせよ、あはれに借しく優しく出来すぎたり、

「不加減で御坐いませう」

「いや、上々、たとひ不加減でも、お手前がお手前だから、乃公には千家の家元よりも、うまいね、はゝゝゝ」

「また御冗談を」

「冗談といへば、いつも汝にいられる通り例の冗談は當分、止めよう、實は過日こゝで聞いた新聞屋ね、それが二日前の朝、突然、邸宅へ来たよ」

「おや、まゐりまして、お邸宅へ」

「あゝ来たよ、不意に襲ひ込んて來をツた」

「ですから常々、うるさく申し上げたでは御坐いませんか、外の事と違つてあれだじは是非お止し遊ばせと、しかし、どう致して、知れたので御坐いませう」

「やはり汝の名からだね、ありやア乃公が悪かつた、全然、無い名にすれば宜かつたのを、そこは自然と妙な人情で、つい、ラツかり汝の名を出したのが失策だツた」

「ほんとうで御坐いますよ、お出し遊ばした後で、承りましたから、第一また新聞屋さんに來られました時、どんなに驚きましたか」

「はゝゝゝしかし淀橋一件を乃公の悪戯とは、太丈夫まだ氣が付かない、あれは別問題になつてるよ、つまり外に汝の名を利用した奴があるといふ事に考へてるらしい、乃公を知つたのは、こゝから歸る時に、つけて來たん



だらう、どうも其新聞記者を歸途の電車で見たり思つたからね、それとなく一本、入れてやると急に顔色を變へたせ、はゝゝゝ」

「それは兎も角、お邸宅の方で、別段、何事も」

「なアに安心するが宜い、別に何事も無い、たゞ應接所で逢つたばかりさ、加之も主客顛倒、いちゝ機先を制して短兵急に斬り込んでやつたからね、寧ろ反對の受太力で、はふゝの體に遁げて歸つたよ、はゝゝゝあれぢやア高利貸の鬼幸一件も女學雜誌の投書も知れる筈がない、黒目鏡と眼病のガ―ゼば取外す事を知つても、巧みに植ゑた八字の附け髭と、大道の露店で前齒二枚に被せた三十五錢の金齒は、まさか知るまいよ、面白いね、はゝゝはゝゝ」

「それが貴君、お悪う御坐いますよ、どれほど面白いか存じませんが、外にお娛樂のないではなし、好奇心にも程度のある事、あまり悪戯が過ぎます

もの、少しは御身分を、お考へ遊ばさないと今に、ドンだ事が」

「よしゝゝ、わかつた、わかつたよ、だから當分」

「當分と仰しやらずに、斷然お止し遊ばないと、萬一、ごういふ間違ひが起らないにも、さうでなくとも妾のやうな、かういふ厄介ものが、御身分の支障になつて居るでは御坐いませんか、妾さへなければ、申すまでもなく立派な奥様も、また可愛い若様も御坐いませうし、お邸宅の方も總ての事に付して」

「おいゝゝ、また始めたよ、困つた女だなア、悪戯の意見は宜いが、そんな事は汝の口から、いふに及ばない、乃公に考量のあるこつた」

「はゝ」

「わざわざ汝に聞かなくつても、この二三年、絶えず周圍から蓄音器に取巻かれた如く聞き飽いてるよ、全體この乃公を華族とか子爵とかいふ肩書で



生きてる人間と思ッてるのが間違ひだ、祖先以来の系圖一卷を守るには乃公でなくとも二人の弟があるんだからね、つまらない愚痴を遠さすと、氣を大きく持ッて安心しろ」

「はら」

「何をいうても、はい〜ちやア、また困るな、今度は乃公の方で、はいはいといふ番になるからね、あまり腹の立たない氣に觸らない小理屈を、あッさりと捏ねてくれ」

「ほ〜、すぐ御冗談を」

「冗談でなく、もし萬一、事が面倒になッて邸宅でも叩き出されたら、どうだい、汝と乃公と二人で、何か面白い商賣でも始めようちやアないか」

「よく御商賣が出来る事で御坐いませう」

「出来るよ、これでも汝、いよ〜食へないとなれば食ふために人間、どん

な事でも出来るぜ」

「もし、さうなれば、何を遊ばします」

「さア、何が宜からう、何に仕よう、乃公の身體は殿様放れがして案外の丈夫に出来てるがね、やはり大道の土方人足には聊か覺束ないやうだ、馬車や自働車の馭者運轉手は乗る奴に顔馴染があッて蒼蠅い、魚屋は生臭いね八百屋は買出しが難しいね、酒屋味噌屋醬油屋は御用聞が面倒だね、牛乳屋も豆腐屋も朝が早過ぎるし、待合や料理屋は夜が更け過ぎるし、元來お辭儀が下手で無愛嬌だから其他一切の店頭で前垂がけの小賣商人は無効だし問屋向にも資本がなし経験がなし、幸ひ大學を出て法學士の名目はあるが裁判官も辯護士も嫌だ、まめでないから新聞社に備うてくれず、怠惰者だから會社員になれず、手が無精だから職人職工になれない、足が弱いから俵は曳けず郵便電信の配達になれない、聲が悪いから浪花節語りにも



なれない、男振が悪いから俳優にもなれない、さア何だ、おい考へてくれ  
何が適當だ」

「まア澤山、よくも數へ立て、お並べ遊ばした事、今、どんな事でも出来る  
と仰しやツたに、皆、いけませんの」

「いけない、なるほど食へないね、考へると皆、いけないよ」

「ほ、さうなれば、もう何もなさらないで、じつと仕て居らした方が  
宜しう御坐います」

「じつと仕て居れるかい、じつと仕て居ちやア汝、飢死だせ」

「その時こそ、妾が、ほ、此キタが一所懸命になつて、何とか致します」

「や、えらい、きのごくだが、さうしてくれ、それに極めて置かう、しかし  
汝、何をする」

「い、え、どうあつても只今は申し上げません、今それを申し上げますと、

すぐに御油断を遊ばしますから、兎も角もその時の事、その時の事、ほ、  
萬事その時の事と致しませう」

「意地の悪い女だな、ちやア聞かない、聞かないが其時は安心して宜いね」

「よろしう御坐いますとも」

まづ乃公の生命は無事だ、もし何事が起つて来ても心細くない、驚かない  
ぞ、いよく子爵も講釋も入らない浮世になつた、は、その代り汝も  
安心しろ、さうなると、この乃公も今の乃公でない、萬事、おとなしく何  
でも汝のいふ通りになるよ、右を向けといへば右、左を向けといへば左、  
あはれツぱく優しく、悄悄としてね」

「ほ、おかはいさうで御坐います事」

「かはいさうだよ、男も汝、さうなると見るに忍びない氣の毒なもんだせ、  
どうせ水も汲んだり拭き掃除もしたり、お飯も炊かされるだらうし、叱言



は朝夕に喧しくいはれるだらうし、雨が降れば傘と下駄を持って、汝の出先へ迎ひに行かねばならず、天氣がよければ汝の肌著を洗濯させられて、その間に御機嫌を取損へば、直に追ひ出されるんだからね、いや、止さう、やはり止さう、考へると、それも乃公には出来ない藝だ、ふゝゝゝ」

「おや、また妙に、ふゝゝゝが出ました事、其ふゝと鼻でお笑ひ遊ばす時はきつと何か、人を」

「なアに人を馬鹿にするが、汝を馬鹿にするもんか、口を開いて聲を出して大きく笑ふのが面倒な時は此鼻で、ふゝゝゝとね、かういふ工合に笑ふのさ、はゝゝゝも、ふゝゝゝも同じこつたよ、黙ッて肩で笑ッたり腹の底で笑ッたりするよりは宜からう、ふゝゝゝ」

「何とでも御勝手に、お笑ひ遊ばせ、ごうせキタは、お笑ひ草に出来て居りますから」

「さア大變だ、まだ約束通り引取ッて養はれない先に御機嫌を損じて仕舞ッた、おい今夜ア久しぶりで落語の席へでも行かうかね」

「また新聞屋さんにも見付けられると困りますから、御免を蒙ります」

「手殿しいね、さう怒るなよ」

「怒ッては居りません」

「喜んで居ます」

「ほゝゝゝ、迎も叶ひませんねエ」

「やゝ安心、汝の怒ッた顔を見て歸ると夜通し魔れて寝られない乃公だからこの笑顔を幸ひに心持よく出よう」

「おや、もう、お歸り遊ばすの」

「明日は來られないが、明後日の夕方から、また叱られに來よう、はゝゝゝ、時に汝、例の葡萄酒を相變らず飲ンでるか、をりゝゝ調べて見るに、ごう



も近來は減りやうが尠い、食後には必ず否でも二三杯づゝやらなすと、  
かんよ、運動の足らない身體だからね」

「はら」

「や、また、はいくが始まりさうだ、ごりや遁げ出さう、逢ふ時は語り盡  
すと思へども別れて残る君が面影、古人はうまい歌を讀むね」

「君來ずば寢屋へは入らじ小むらさき我もとゆひに霜はおくとも、これは誰  
やらで御坐いましたねエ」

「誰でも宜い、まア汝と乃公の事に仕て置かう」

歸りたき心なくて歸らざるを得ぬ身、歸したき心なくて歸さざるを得ぬ身、こ  
れが浮世なり、

其 八

冬の日の夕暮、わけて上野の廣小路を眞一文字に吹きぬく北風の激しさ、電信  
電話の針金も寒空に泣き出せば、その下を駈け廻る人間なほさら年の瀬に抑詰  
りし十二月二十三日、あとの一週間に泣き顔を曝して、一年中の油斷大敵に追  
ひ立てられ、これを四方へ運ぶ電車の音響まで、何とやら人生一種の悲慘を含  
めるが如し、  
その中を急かす慌てず寒からぬ筈の身なれど、ものずきに時候外れの散歩は元  
來の變りもの、ぶら〜と歩める松川廣行の面影を、それとも氣付かず不意に  
横ざりしは例の探訪記者、

「やア君、君」

わざ〜五六歩、追ひかけて軽く背を叩けば、はッと振り返りて俄の會釋も聊か  
狼狽氣味、

「これは、これは」



「先日は失敬しましたな」

「私こそ」

「ごうです、お忙しいやうだが、一時間ばかり僕のため迷惑して下さらないか、石にでも躓いたと思つてね」

「恐れ入ります、しかし、ごういふ御用で」

「なアに用のある筈はありませんよ、散歩ですからね」

「散歩、この寒いに御散歩ですか」

「は、い、まア散歩ですな、時に過日お約束してから電話を待つて居ましたせ、幸ひ時刻だ、どツか其邊で夕飯を食ひながら話させう」

「有難う御坐いますが、實は少々、急ぎますから」

「大火急は兎も角、少々ぐらゐの急ぎなら宜いでせう、天下國家の大事でもなしさ、は、い、い、い」

見付けても追ひ廻しても逃げ出すべき筈の身が、わざわざ我を呼び止めての夕飯は、夕飯以外に損のない相手と、はや既に探訪先生の胸算用、

「では御遠慮なく、お伴いたしませうか」

「甚だ勝手ですが酒と女は止して、たゞ食ふだけに、どこか宜しいね」

「さア、どこでも御随意に」

「ちやア遠くも面倒だし、池の端に鳥料理がある筈だ、寒いから鳥鍋でも君つツつくさ」

池の端の小二階、鳥鍋を中間に置いて、外套そのまゝの背廣服に大胡坐の談笑  
どうしても華族様でなし、

「しかし寒い日ですな、この寒いに相變らずの馬鹿でね、初音町から今日はわざと冬枯の上野をぬけて大迂回に歸らうと思つたところですよ」

寧ろ羨むべき御愉快です、私なぞは、もはや年内に餘日のないため一所



懸命に近道を走り歩いてさへ、なか／＼事が運びません、無論、境遇が違ひますから」

「なアに境遇は君の方が愉快で面白いよ、僕なんかア今日のところ殆ど社會に不用の人間だからなア、社會のみならず家に居ても殆ど用のない人間さつまり居家處世いづれにも當分は何等の要求さるべき資格もない、はゞと」

「どう致しまして、そこに却つて普通一般の暖衣飽食者でない貴君の本領が或意味を以て暫く顯はれないでなく、顯はさない所以で御坐いませう」

「なアに君そりやア大變な買被りさ、よほど割引して賣込んでも僕の方に利益がある、はゞ／＼時に例の一件、あの悪戯者は、まだ分らないですか」「いや、それに付いては他にも同じやうな手段を施した奴ですから随分、油断なく、各社ともに相應の努力を費して居りますが、何分まだ」

「は、ア、その様子ぢやア、ます／＼世間を馬鹿にして今後なほ、いろんな悪戯を面白半分に、やりかねない奴ですなア、つまり一種の病的かも知れない、他の事は兎も角、さし當つて僕の初音町では、あれがために本人、頗る神経を痛めて、此後また如何なる意外の事に自分の名を悪用されるだらうかと、つまらない考へから殆どヒステリーを起しかけたには、僕も聊か弱つたよ」

「御婦人の事ですから猶更ら以て、お弱りで御坐いませう」

「實は君、此日もいふ通り、妻は妻としても當分、ある事情の下で、家に迎へ取るには多少の面倒と時日を要する女ですからね、あゝいふ事があると本人は勿論、僕にも將來の迷惑は尠からん理由で」

「いや失禮ながら其邊も、始めて伺つた時、既に御推察は致して居ります」「何とかして君、一時も早く其奴を捕へたいもンですなア」



「實は新聞社としても多少、やられた氣味がありますから、早晚、決して遁  
さない覺悟で居ります、そこは社會の耳目で、御覽下さい、さつと今にわ  
かりますよ」

「よく考へて見ると悪戯は悪戯だが、その悪戯に一種の意味を含んで面白い  
奴だ、現在、迷惑をうけるものさへなければ、僕なんかも實は、やりたい  
くらゐだ、はゝゝ、時に君、僕は面倒臭い事が嫌ひで萬事この通りの露骨  
だから、ありのまゝにいふがね君、この勘定を、これで拂つてくれ給へ  
殘金は失敬ながら傳賃の一端にして貰はう、警察官さへ犯罪搜索の懸賞は  
出来るンだからね君」

ポツケットより露西亞革の二つ折を取出だし、そつと探訪先生の膝の脇へ百圓  
紙幣を一枚、ついでに片ガラスの金時計、ちらと見て、

「や、おくれた、君、ゆつくり君は後から、これで失敬するよ」

すつと其まゝ立てば、慌てゝ送り出ださむとするを、振返りもせず片手に押し止  
め、

「よけいなこつた、いづれ其うち君、またね」

立出でし松川廣行おもはず人しれぬ心の微笑、あれで悪戯者の正體ますゝ分  
らず、別に問題となりかけし初音町も總ての取消、まづ世間へ對して當分は我  
一身の天下泰平、いかに年の暮とはいへ、たつた百圓とは案外に安いものなり

其 九

いかに平生は佛面した奴も、その佛で越されぬ年の瀬に迫れば、潜める心の鬼  
を次第に現はして、そろゝ角を出しかける大晦日の五日前、

六番町の子爵松川家の玄關へ朝の九時ごろ、一葉の名刺を差出だして長男の廣



行に面會を求めし老爺は、わけて押詰りし年末にひとごろしの忙しい木戸幸四郎、これが都下第一の高利貸を以て聞えたる鬼幸とも知らぬ取次に案内せられて、應接所に導かれぬ、

暫し待つ間の茶菓子を此まゝ見て居ても、あとで譽められる筈なしと五個のうち二個を食うて残る三個を袂へ入れ、じろく室内の粧飾を見廻しながら、もしこれを競賣に附せば幾何になるとの胸算用、ストープの上の置時計に目を注いで、はや十分、十五分、二十分、やア三十分に近づいた、これだけの待ばかり、どうして取ツてくれようと思案の折しも、扉の開く音、

はツと椅子を立ちて、錢の入らぬ事には惜し氣もない老爺、テーブルに額を擦り付けて挨拶すれば、洒落の松川廣行、ふしぎに今日は大名風を吹かしぬ、

「長く待たしたね」

「どう仕りました、いえ他で待ちますには甚だ迷惑な時期で御坐います、が、

お邸宅などは別の儀と心得て居ります、はら」

「兎に角、例の事は、宜いかね」

「宜しう御坐いますとも、それがため餘日のないところを、わざと伺ひました次第で、はい、かねて仰せの通り、本所割下水の者とは申し上げました、手前名では萬事お差支のある事と存じまして、御家來へ差上げました名刺も實は、あり合はせました他人の名刺で」

「あれで都合が宜い、邸宅の者は誰も知らないよ、は、は、しかし忙しいだらうね」

「いや、もう、かやうな業體は年が年中、いつとても寸暇は御坐いません、つまり金よりも身體が資本といふやうなもので御坐いますして」

「なるほど、さうだらうな」

「御前のやうな方ばかりを、お相手に致しますれば、これほど樂に有難い家



業は御坐いませんが、なか／＼、さうはまゐりませんもので、絶えず蒼蠅  
い事のみ毎日毎日駆け廻ッて居ります

「中には随分、面倒なものもあるだらう」

「面倒なのは通例で、酷いになりますと、俗に申す踏み倒し屋、最初か  
ら仕組ンで置いて手前どもを食物にする奴が御坐います、よほど相手を取  
調べて用心に用心を重ねませんと、うツかり術に乗せられまして、はい、  
眞實は借りるよりも貸す方が骨の折れまするもので」

「は、ア確實な證文があッて貸す方と借りる方だから、決して間違ひのない  
筈だが、案外、むづかしいもんだね」

「決して間違ひのない筈で居ながら、常に絶えず間違ひの起り易いもので御  
坐います、何分、ちよいと一時の都合上で、いはゞ當座の間に合はせに借  
りて下さる方は間違ひなく安心いたしますが、さんざ藻掻き歩いて借りる

だけが力一ぱいの相手にはなか／＼油断が出来ません、時に御前の御都合  
を今日」

「都合して来てくれたかね」

「いたして、まゐりました、仰せの五千圓だけ」

「此日も話した通り、まづ五千圓あれば父の耳にも入れず、また會計の者に  
も妙な顔をされずに今年の暮は濟むからね、實は其うちの三千圓を友達に  
費はれるのさ、は、は、恥かしいが打明けたところ乃公の小遣は、月々三  
百圓づゝだから、をり／＼困る事が出来るんだ」

「月々三百圓の御小遣は結構で御坐いますよ、三百圓も世間普通の三百圓と  
違ッて、お暮らし向は勿論お身の廻り一切に御心配のない正味の三百圓は  
なか／＼大したもので御坐います」

「しかしね、月々その三百圓で不足を感じてるくらゐだから、今日借りる五



千圓は逆も急に返せないせ、最初から乃公は自分の小遣まで打明けて正直に言ッて置く、どうしても一年か一年半は」

「よろしう御坐いますとも、委細承知いたしました、さう明白に承りますれば手前に於て猶更ら安心いたしまする理由で、はい、たとひ證書面の期日は期日で御坐いましても御身分に對して催促がましい儀は毛頭、はい、また利息の點も、決して御心配に及びません、いち／＼書替の節その元金へ差加へますれば同じ事で、は」

これが鬼幸の憲法、利に利を積み上げて尠くとも三四萬は瞬／＼間に絞り取る覺語、まづ今日その序幕として懷中より差出だせしは紙幣の一束と公正證書の委任狀、

「どうか、この委任狀へ御判を願ひます」

「よし／＼この委任狀へ判を捺せば宜いんだな」

「はい、御自筆の御記名と御判さへ戴けば、それで宜しう御坐います、あとは手前の方で萬事」

「さうか金は約束の五千圓だな」

「は、五千圓で御坐いますが、期限を三個月と致しまして、利息を前に戴きますから、これに現金が三千七百五十圓」

「三千七百五十圓、五千圓の金が何故、さうなる」

「つまり三月二割半で、五千圓の二割半、即ち千二百五十圓の利を天引に致しますので」

松川廣行、おもはず眉を擡めて小首を傾けながら、ビツと鬼幸の顔を打守りしが、俄に椅子を立ちぬ、

「いやだ、もう金は借らな」

流石の鬼幸、あツと驚きぬ、



「御前、ごご御前、さう仰せられては、これが手前どもの規則で御坐います」  
「其方の規則か知らないが、乃公は五千圓の入用だ、三千七百五十圓では借りても足らない」

「しかし御前、利息といふものが」

「利息は後だ、先へ拂はな」

「でも御前」

「うるさい、乃公は氣が短いから、ぐつぐつ小面倒な事は大きらいだ、金は其方の金で、借りる借りないは乃公だ、もう止める」

「今更ら御前、さやうな事を、一時間の暇を潰して幾何になるといふ金貸商賣の者が年末の忙しい中を、わざとくまゐりました手前で、たゞ御機嫌を伺ひに来たものでは御坐いません、加之も此件に就ては二度まで手前方へお越しになりましたればこそ、それを今更」

「いや、二度、出掛けた事は非認しない、たしかに乃公が自分で借りに出掛けた、また屋敷を見届けた上で直接に取引するといふ事も承知して今日この應接所へ通した、また松川家の相續者たる廣行は乃公で乃公が本人に相違ない、また年末の繁忙中を割いて乃公の機嫌伺ひに来る筈の人間でない事も念に及ばず知ッて居る、しかし三月二割半といふ事は今が聞き始めだ會て一言の約束も仕てないぞ」

「では御前、手前も折角、かうして伺ひました以上で御坐いますから、御入用の現金を五千圓、さし上げまして利息を證書面へ書き入れ、六千二百五十圓に」

「なほ嫌だ、兎も角も一切、すべて嫌だ、止さう、借りない、嫌と思ひかけると呉れても貰はない乃公の性分だ、しかし金を貸して利を取るものが、たゞ呉れる筈はないね、はゝはゝ」



いはゆる世間しらすの大名華族、お家潰しの若殿様に出來た甘口と思ひの外、  
びりりと舌を刺すやうな辛い味を嘗めさせられて、加之も年末の一時を争ふ金  
と足とを無駄骨にせられし鬼幸、此まゝ無事に歸る奴でなし、

「松川さん、廣行さん、高利貸も外の高利貸とは少々、違ひますせ、御承知  
でせうが本所の木戸幸四郎です」

「知ツてるよ、本所どころか東京中に鳴り響いた鬼幸、ひとごろし、兼て聞  
き及ぶ有名なもんだ、いづぞや新聞廣告の黒枠に這入ツて生葬式をやツた  
事まで知ツて居る、奇抜は奇抜だが、ありやア全體どういふ料簡だツたい  
まさか香奠を集める心算でもなかつたらうね、はゝゝゝゝゝゝ」

鬼幸ますゝ角を振立てゝ赤くなり、わざと應接所を漏るゝ俄の大聲、

「猫の手も欲しいといふ年末の忙しい中だ、用のない閑人を相手に餘計な喧  
嘩も仕て居れないが、利息も手數も此方の言ひなり次第で跳り返りの羽が

生えて飛ぶやうな三四千圓、わざゝゝこゝまで暇を潰して持つて來さして  
おまけに家來でも厄介でもない他人の口から御前の殿様のといはした上、  
今更ら入らない借らないで済みますか、この金と身體の無駄になツた損料  
を松川さん、どうして下さる」

「おア」

「さアでは困ります、何とか目鼻を付けて下さい」

「さアで氣に入らねば、まア仕様がなとして置かうか」

「仕様がないちやア歸れません、この木戸幸四郎を歸すやうにして歸しな  
さ」

「どうすれば歸る、よもや叩き出してくれと、いふんぢやアなからう」

「何、叩き出すウ」

「乃公の方から叩き出すんでない、慌てずと言葉の意味を、よく聞けよ、ま



さか其方で叩き出してくれと頼むんぢやアなからうといふのさ、杖も突かず手を引かれず無事に這入ッて来た奴が、急病でもないに歸れないといふ筈があるかい、歸りたければ、遠慮なく、さつさと歸れ、それとも叩き出してくれといへば直に叩き出してやるぞ、うろたへて松川廣行を豆腐のやうに白く柔かい華族の子息と見違ふな、はゝゝゝ」

「おい、松川」

「何だ、御前が改めて呼捨てになつたね」

「當然さ、どこに御前の價値がある、この大きい屋臺骨に住んで居ながら一膳飯の目方を量るやうな人間は呼捨てと澤山だ、おい松川、今いふ通り金と身體の暇を潰した損料を出せ」

「はゝア損害賠償といふのか、こりやア面白い、高利貸を相手に借らない金と身體の時間を費した損害賠償は面白い、乃公も實は帝大の法科出身だから」

「いよゝゝ出せないな」  
「出せないンでない、出さないンだ、是非とも取りたけりやア訴訟を起せ、これ以上この事に付いて再び口を開くの必要はない」  
「ないで済むか、其方に必要なくとも此方に必要あるンだ」  
「うるさい奴だな、まだ分らないか」  
「うるさくば、うるさくないやうに仕ろ、分るも分らないも其方次第だ」  
「此奴め、大きい聲を出せば迷惑すると思ツてるな、はゝゝまた捨鉢に出れば持餘して何とかするものと考へたな、さういふ術は外で通用しても乃公には無効だよ、もし屋敷の者へでも聞かさうといふ料簡なら、わざとく咽喉を痛めて喚くに及ばない、これを開けてやらう」



すつと俄に立ちて入口の扉を開けば、あまりの大聲に何事の起りしかと戸際に耳を敬てし三太夫以下四五人の男、わつと一時の不意に倒れ込むや否、流石の鬼幸、おもはず驚いて椅子のまま後へ引くり返りぬ、

「は、おい、その老爺を引起して門外へ出せ、ぐづぐづいへば巡査に渡して仕舞へ、そりやア鬼幸といふ有名な高利貸で金を借らない乃公に難題を持掛けて来た奴だ」

いはゆる鬼に金棒の地獄道、鬼幸が金の勢ひに咽喉を鳴らし角を振立て、向へば、いかなる相手も其まゝの無事には置かず、十中の八九は血を吸ひ肉を喰ひ骨まで舐るべき筈を、この松川廣行だけには首尾よく仕てやられて、二重三重に利を取る金と一歩二歩を勘定に見積る大晦日前、一文にもならぬ暇を潰され思ふ存分に嘲弄され盡けらの如くに摘み出され、果は巡査の手にかゝりて高利貸と華族の對照、否應なしに追ひ拂はれ、うかうかすれば強請がましい舌を吐

した老爺と見られて、尠くも一夜ぐらゐる拘留せらるゝ雲行に、それが何より以て恐しい年末の鬼幸、無念の涙と水鼻とを垂れながら、はふぐの體に逃げ出しぬ、

この年末この鬼幸が半日の働さを奪はれたため、おもはぬ不意の責苦を免れ生命を延せしもの満都幾何ぞ、さけば癩飲の下るだけでも時に取つての人助けなり、

「この忙しい中を畜生、ひどい目に逢はしやアがツた、どうするか今に覺えて居れ」

されど安心なり、金を借らぬ以上は怖い奴でなく、わざと暇を潰して復讐に來る奴でもなし、

其 十



年々歳々、同じ事ながら追ひ廻し追ひ廻さるゝ年の暮を、追ひもせず追はれもせず、浮世を餘所に初音町の隠れ家、

「月日に關守なしで、いよゝ今年も今日、一日となりけりだ、早いもんだなア、一夜あけると汝も二十六になるんだせ、十九の春は、つい、この間のやうに思ッてるがねエ、十九、二十歳、二十一、二、三、四、五、はや足かけ七年だ、あゝ二十六になつたかい」

男兒無量の感慨、わざと我事を心の底に押伏せて、口に女の年を數ふれば、猶更ら女氣の身を切らるゝよりも辛き風情、

「存じて居ります、一夜あければ相違なく二十六で御坐います、女の二十六は殿方の五十以上といふ事も、よく心得て居ります、決して若いとは思ッて居りません」

「や、また出損つた、さういふ意味ぢやアないよ、たゞ二十六になるねエ、

と云ふのだ」

「ですから二十六の、お婆さんになると申して居ります」

「はゝゝゝしかし人が乃公に問へば、二十六になるといはないね、たしか汝は十一月の七日出産だらう、だから生れた年を空にして今年二十四だ、ね、ところを女は世間に向うて通例、二割を引くさうだから、ざつと二二が四年の四年を差引いて二十歳だ、誰に遠慮なく二十歳で宜いせ、實際また汝は美人だから年齢の割合に、ずつと若く見えるよ、七年前の十九も今も同じだ、少しも變らないね、冗談は置いて全く汝の輪廓と肉附の工合が、さう出来てるんだね」

「まア眞面目な、お顔でさ、よく、さう人を馬鹿に出来ませす事、ほゝゝ生來、妾のやうな馬鹿は宜しう御坐いますが、人によれば貴君、とんだ事に」



「いや、眞實だ、もう既に一件、とんだ事になつたよ、また汝に叱言の種を蒔くやうだがね、白状して仕舞はう、いつか新聞廣告の黒梓へ叩き込んでやつた鬼幸といふ高利貸を過日、ちよいと馬鹿にし過ぎてね、それがため、いよゝ乃公の一身上に波瀾が起きて来た」

「それ御覽あそばせ、なせで御坐いませう、貴君は、まア人もあらうに、高利貸のやうなもの」と

「はゝゝゝ」

「笑ひ事では御坐いませんよ」

「なアに高利貸が直接に乃公の一身上を、どうしたといふ理由ぢやアないかね、つまり高利貸といふ奴は年末の晦日前に最も大膽な悪辣手段を發揮して、冷酷残忍に人の生血を絞る奴だからね、この際これを馬鹿にするは頗る效能があつて面白いのみならず、たとひ半日でも他に向ふ手足を封じて

やれば實際、いくらか世間に助かるものがあるよ、そこで乃公が二度まで鬼幸の家へ出かけて 五千圓借入の約束した上、いよゝ取引といふ日に屋敷へ呼び込んで」

「あら、お屋敷へ、まア」

「そこが乃公の手だよ、さうぞ應接所で待たして置いてね、いかにも初心らしい大名風を吹かしてやると、彼奴、ますゝ乃公を世間しらすの殿様に甘く見て来たから、こゝといふ最後に一本、あつと驚かしてやつたが、いや面白かつたせ、しかし流石に鬼幸と名を取つた奴だ、こりやア一ぱい食つたと気が付いたもんか、急に淺黄頭巾を脱いで捨鉢の喧嘩腰に強請をかけて来たから猶更ら面白かつた、思ふ存分に嘲弄し罵倒してさ、あげくの果は巡査の手に渡して仕舞つたが、あとで考へて見ると、彼奴も一個の商賣だ、聊か薬が利き過ぎて、かはいさうだつたよ、はゝゝゝ」



「ま何といふ事を、なさるんでせうねエ、さういふ事を遊ばして、お屋敷の方は、ごうも御座いませンの」

「ところが屋敷の方は少々、面倒が起きたよ」

「どんな御面倒が」

「いや、それも實は多少、豫期して居た事だよ、強ち鬼幸の一件からでもな、つまり數年以來の問題になつて居た乃公の身體だ、もう年も三十を越すしね、父も段々と老衰に及ぶしね、彼是、いろ／＼な事が綜合して來て來春いよいよ親族會議の上で、何とかするんだらうさ、は／＼しかし最近の原因は、やはり鬼幸だ、時も事もあらうに年末に押迫つた今日、高利貸を屋敷へ引入れて身分も顧みず喧嘩するやうなものは到底、其まゝに仕て置けんといふのが親族會議の動機になつたので、なるのは當然さ、お家は末代お身は一代といふのが昔から大名の不成文律でね、社會は違つても

今日の華族まだ依然として其風があるよ、祖先以來の家を立てるためには當主も後嗣も眼中にないんだ、まして乃公のやうなものに家を嗣がすべき筈がない、また乃公も嗣ぎたくないのが年來の希望で、寧ろ雙方の好都合で、いはゞ性格上、間違つて華族の家に生れて來た乃公だからねエ、かういふ時に堪へ難い愛情を以て泣かれる母のなほ、相濟まぬ理由だが實に僥倖だ、恐れながら皇室の藩屏たるべき光榮を荷ふには、猶更ら以て幸ひ現に軍人となつてる弟があるし、加之も弟は乃公と正反對で頗る誠直に謹嚴なものだ、季は妾腹だが此奴また前途に家名を辱しめるやうな性質でなし、どう考へても乃公だけは松川家に不用の男だ、實は業々しい親族會議を待たずに乃公の方から廢嫡を迫つてやらうかと思つてるよ」

「さうなるに付きましては、定めて、そればかりでは御坐いますまい」

「なアに今いうた、それだけの事さ」



「いえ、それには、きつと、妾の事が」

「また始まった、よし汝の事が含んでるにしろ、宜いぢやアないか、汝のためには華族が嫌になつたといふ理由でなしさ、華族が嫌の乃公に汝といふものが、出来て、今日まで、かうなつてるんだから、心配するな、つまり別問題だ」

「たどひ、たどひ別問題にして戴きましても、人様は別問題にして下さる筈は御坐いません、さうなるには、やはり妾のため幾分か、貴君の御身分を」

「傷けたといふんだらうが、さらに傷いて居ないよ、もし華族の長男たるを以て人間最上の幸福とし誇りとする乃公ならば、なるほど、傷けたにも當るがね、それが嫌で實は廢嫡を望んでる乃公だ、寧ろ却つて乃公の本心を知らない奴のため多少の罪を嫁せらるゝ汝に對して、乃公は氣の毒に感

じてるくらゐだ」

「あら、勿體ない事を」

「いや、例の冗談でない、こりやア眞實だ、乃公は學校時代から一の或主義を持つて居てね、もし時機を得れば大に活動してやらうと思つてるが、何分あゝいふ家に生れて、内外ともに自由を束縛せられてるから、その主義を行ふ事が出来ない、しかし出来ないから止める乃公でない、つまり主義と境遇が兩立しないんだ、わかつたか、それがため實は汝といふものがなくとも、どうせ華族の後嗣にならない覺悟だ、いゝかね、その乃公に汝が何を傷けた、寧ろ汝のため乃公の目的を達するに却つて時日を早めたくらゐだ、一面また戀愛といふ點から見れば、此ごろの小説や新聞雑誌の活字に植ゑ付けられてある簡易輕便の戀愛と違つて、そもゝ戀の神聖は人しれぬ乃公と汝の間にあるせ、大體は自分の性格と主義から來て居るもの



つまり世人の最も羨むべき富貴を捨て、一家一門の謗りを受けながら乃公は汝を愛し、また汝は立派に何處へでも喜んで迎へらるゝ容貌と性質を持つて居ながら女の生涯に最も惜しむべき十九の春より七年の今日に至るまで、晴れて楽しき世間の月も花も見ず、殆ど浮世を捨てたやうな、この淋しい日蔭に身を埋めて、人並すぐれた氣儘な乃公を大切に守つてくれるんだからねエ、いはゞ雙方とも互に自分の不利益と知りながら、かうなつて交情だ、もし他人の眼から見やア、これが所謂腐れ縁とでもいふんだらうなア」

廣行の眼中に思はず一滴の涙 キタ女は其まゝ物も得いはず疊に伏して泣く音を忍びぬ、

「しかし、泣く事はない、氣を大きく持つて安心しろ、この廣行は家を出ても廣行だ、華族の肩書を取つても飢死する男でない、また汝も華族の外妾

といはるゝよりやア、公然と人の妻たる方が宜からう、宜いだらう、どうだ」

「はゝはい」

「それが宜けりやア何が悲しい、また決して疾しい點もなし誰に向つて恥づる事もないぞ、この乃公を藝妓狂ひでもした世間の放蕩兒と一般、もし來春の親族會議で無禮な言を吐いて汝の事を妙に彼是いふ奴があれば、寧ろ正反對に逆撃して華族の肩書ばかりか松川の姓まで置いて來る覺悟だ、いづれも皆お家萬歳の連中、定めて驚くだらうなア、いよいよその時はキタ公公の方から汝の方へ養子に來るンだせ、松川廣行でなく山村廣行だ、はゝゝゝ生きた人間が釘付にされたり函詰になつて堪るもンか、天下の横行濶歩に餘計な厄介荷物は面倒だ、ねエ、汝と二人連で澤山だ」



あはれに泣かれしを、わざと笑ひながら、やがて二人の春を待てよと鶯の初音町を立出でしは午後の四時過ぎ、團子阪を上りて例の白山前より三田行の電車、

肥馬輕車に乗れば乗らるゝ身なれど、乗るべき用もなく、また乗りたくもない松川廣行、大晦日の満員に汗の出るほど押込まれて、終夜運轉の四字に遺憾なき浮世の裏面を解釋されながら、ふと俄に思ひ付いて神保町の乗替より、家には歸らず其まま青山へ、

いよ／＼我を問題として親族會議を開けば、その列席中に多少の殿様風を脱して盾の両面な語るに足るべきものは、青山の西田伯爵、廣行のためには亡母の里方、現在の當主は叔父に當りて今年四十五、世間に知られし道樂は書畫骨董

と銃獵なれど、をり／＼鐵砲を荷いだまゝ三日間も獵犬を待合に繋ぎしといふ風聞あり、加之も貴族の政治界では常に名高き幹部の一人、

主客ともに今日は猶更に用のない人、うき世を隔てし奥の一室に差對うて、晚餐の膳も退け人も拂ひ、互に打解けて世間談話の末、

「甚だ突然ですが、廣行の事に付いて、いよ／＼來春は親族會議が始まるさうですね、無論、御當家へは一番に御列席を願ふ筈でせう」

「いや、實はね、ちよいと、さういふ内談がありましたから、その以前に一度、逢つて置きたいと思つて居たところです、幸ひ今夜お話しを聞かう、お家の方では大分に何か喧しいやうだが、全體、どういふ事が最大の原因



になつて居ますね、かりにも親族會議といへば容易ならん事だ」

「その容易ならん親族會議にかゝる廣行ですから、いふまでもなく、松川家に取つては不祥の子です、つまり家風に合はない長男といふ事は、今更ら申し上げずとも、兼々お分りで御座いませうが、只それに付いて少々、この際に聊か、お耳に入れて置きたい事が御座います、敢て自分の不利益を恐るゝための辯護でなく、申譯でなく」

「なアに以前から、ちよいと妙な風聞を耳にしないでもない、をりくは聞きましたがね、聞く人間が、これだ、はゝゝゝのみ驚きもせず、また悉く真面目に聞いては居ませんよ、しかし親族中、さういふ人物ばかりでもなしね、寧ろ第一に喧しく心配せらるゝ筈の、お父様が却つて案外に淡泊だ、いろく他から騒がれるため實は餘儀なく今度の親族會議も承知せられた點があるらしい」

「いや、父には全く、相済みません」

「お父様は、あれで、なか／＼分つたところのある人ですからね、しかし今夜この西田へ改めて、どういふ、お話しがありますな」

「これは廣行の生涯に關する事で、一場の坐談では御座いませんから」

「よろしい、その覺悟で聞させよう」

「いよ／＼親族會議の節は、どうか御當家より第一番に單刀直入、廢嫡論を出して戴きたう御座います」

「ふむ、廢嫡、もし廢嫡論の出るやうな事があれば、極力それを打消せといふんでなく、寧ろ進んで當家から廢嫡の口火を切れと、いはるゝンですか」

「さやう」

「はゝア、それほど廢嫡が希望ですか」



「祖先に對し父に對しては何とも申譯のなき次第、また一門の方々に向うては猶更の事、まさか廢嫡を自分の希望とは、この口を開き兼ねますが、ありのまゝ露骨に廣行の心體を打明けて、少しも詐らざるところを申せば、やはり廢嫡を願ひます」

「その理由を聞きませう」

「理由よりも何よりも事實を簡単に忌憚なく申せば、華族が、いやです」

「いや、華族に生れたのが何故、どうして、いやですぬ」

「これは申し上げやうが悪かつた、言葉が足りません、つまり廣行が華族を嫌うて避ける意味でなく、華族そのものが元來の廣行に適しません、華族の境遇その他に於ける總ての習慣が廣行の存在を非認したと同じ結果で、既に華族として不似合の廣行は今後なほ華族たるべき修行に堪へません、まして二人の舍弟ある以上、祀を斷つ恐れもなく、家を保つ必要から

は寧ろ今のうら廣行の去る方が、却つて萬事の好都合かと心得ます」

「や、思ひの外、なか／＼手厳しい論鋒ですな、しかし廣行さん、それには何か、必ず他に別の理由がありませう、失禮ながら、あると見ますね」

「見えませう、無論、見えませうが、廣行の方からも失禮ながら其のお見方は少々、見當違ひがあるかと、思ひます」

「こりや面白い、さう大した見當違ひは、あるまいと考へますがね」

「では御遠慮なく、お叱り下さい、どう見えます」

「はい、廣行さんには久しい以前から、氣に入つた女があるかのやうに聞きましたかね」

「大方、さういふ御見當と思ひました、は、い、いかに廣行には久しい以前より一人、捨て難い女が御坐います、しかへ、それと華族とは全然これ何等の關係もない別論で、もし萬一、たとひ其女を屋敷へ迎へ取つて公然



の妻に許さるゝとしても、やはり廣行の馬鹿は依然として華族たるべき總ての修行に堪へません、また假に其女がないとしても、やはり廣行の馬鹿は依然たる馬鹿で、今日このまゝの境遇に同族より正妻を迎へて家を守る事は出来ません、さらに他から見れば外妾の愛に溺れて自己の身分も本心も打忘れた奴と、いはれるでせうが、なアに其くらの事は辯解もせず不平の種にもせず甘んじて平氣に受けます、以上まづこの點より御覽下すつても、廣行の華族を嫌ふ理由と其女のある理由とは、少しも關聯して居らない筈ですが」

「なるほど、さう聞けば其女に少しも關聯して居らないやうだが、さて世間は蒼蠅いよ、さうは思ふまいね、しかし、それも甘んじて受けるといふ以上、もはや致方ないものとして、華族の家を去つた後の廣行さんは全體、どういふ目的ですか」

「おとなしく仕て居れば人世の最も急務たるべき衣食住の何物たるを知らずして、安樂に生涯を送るべき華族の家を去るくらゐですから、無論それに対する相應の目的は御坐いますが、目的は目的を達する時、語らずとも自然に立證さるべきものとして、それまでの間は、たゞ一身の自由を得たいためと思つて戴きたい、つまり度し難い我まゝものを暫く捨て、置くといふやうに御覽下さたら、いろ／＼と定めて、お耳に這入つた事も御坐いませうが、わけて最近の一例、事もあらうに高利貸を屋敷へ呼んで悪戯半分に喧嘩するやうな奴が、どうして華族の體面を保ち得られませう、はゝゝもし舊幕時代ならば輕くて押込隠居、うかうかすると詰め腹を切らさるゝ奴です、この一個條、既に今日の廢嫡問題として十分の價値がありま

す、親族會議の席上、是非とも御當家より第一番に願ひます」

「や、高利貸の一件も、すぐ其日に或者から聞きました、はゝゝゝあれは



廣行さん、あまり酷い、あまりに大膽すぎた悪戯だ、しかし他の人々と違  
つて、この西田は其間に一種の快感を覚えましたがよ、兎も角も今の華族連  
中では逆も出来ないコツた、は、は、は、あ、いふ思ひ切つた事が、よく平氣  
に遣れますね」

「そこが馬鹿です、今日の華族としては、狂氣にでもならない以上、まア出  
來ますまい、つまり馬鹿さ加減に念が入り過ぎて、程度の知らない奴です  
「は、は、は、」

「いや、善悪は別として、いかにも廣行さんは事々物々に殆ど程度の知らな  
い人だ、なるほど、總ての點を或程度論に限られたる華族の組織上には不  
適當の性格だ、つまり無事に苦しむ人だ、安閑として居れない人だ、よろ  
しい、わかりました、もし親族會議のあつた時は、第一番の憎まれ役にな  
りませう、それと同時に尠くとも四五人の生活費に見苦しからぬやう、こ

の西田が引受けて財産上の事まで論じて見よう、論じるでなく、きつと出  
來るだけの責任を帯びませう」

「何、それには及びません、たゞ現在のまゝ家を騒がさずに首尾よく廢嫡を  
願へば、十分です、寧ろ赤裸々で世の中へ飛び出す方が却つて」

「さうでない、あとへ直る舎弟として、それでは濟まん、萬事この西田に任  
せなせう」

「有難う御坐いますが、それだけは萬事に程度を知らない廣行も程度を知つ  
た人間として、お扱ひ下さるやうに願ひます、廢嫡問題と金錢問題と、あ  
まり甚だしい關聯は華族と彼女との關聯よりも寧ろ苦痛に感じますから、  
は、は、は、」

「これは恐れ入つた、は、は、は、とところで廣行さん、其女を一度、見たいも  
ん  
だね」



「御覽に入れるほどの女では御坐いませんが、もし、お差支なくば廣行の家を出ました後、いづれかへ住居を定めますから一度お立寄を願ひませう、伺はせませす筈ながら」

「は、は、は、それも廣行さん、その邊の程度で止めて貰ひたい、それこそ程度なしに遣られては困る、いづれ拜見した上また改めて承らう、は、は、は、ところで今夜の事は一切お互に秘密、よろしいかね」

「よろしう御坐います」

其十二

上野の森に添ひし初音町、ことしの最終を告げて鳴り響く除夜の鐘は、いつこの葉も篩ひ落せし霜夜の梢を渡りて、寝られぬ身に猶更ら近し、

女一代、あの鐘の音に送られて、再び還らぬ二十五の年を過すかと思へば、うき世の月も花も君たゞ一人に宿せし身なれど、何とやら惜しき心地、晴がましき衆人中に珠玉を光らして虚榮に憧るゝ身なれど、何とやら悲しき心地、時代の流行を逐ひ女優を學びて世間に誇る身ならねど、何とやら淋しき心地、面影の變らで年の積れかしとは、しみとくと今更ら我身に泌みて覺えぬ、されど十九の春より二十五の今日まで七年越の間、あたら身を目陰の埋れ木に捨て置かれしとは、我を慰め給ふ君の言葉にこそ聞け、容色を賣りて戀を知らぬ他人の心、いかで我身を知るべき、玉の輿に乗せて都大路を迎へらるゝよりも、富貴の臺を忍びて通ひ來ませる君のため、春の花は寒き寢覺の睦言にも咲き、秋の月は星さへ見えぬ闇夜の枕にも照らされぬ、まして世の一口に賤しき妾といへど、我は妻ある人に弄ばるゝ身でなく、妻



なき人の戀に靡きし身、情は猶更ら名のみの冷き夫婦よりも暖かに、いづこの誰を羨むべき、いづこの誰に恥づべきぞ、此まゝの生涯を世間に交はらずとも君たゞ一人を萬人の力として、

この力草、もし絶えなば絶えよ、君を怨まじ、我も歎かじ、ただ我生命も共に絶なむのみ、いづれ色香の長からぬ女一代に七年の嬉しく樂しき月日を過せしと思へば、この世に何の心残りもなし、

されど情の神、戀の神、また運命とやらの神も在して、もし我身を哀れと思召さば、たとひ君のために容色を捨てらるる事ありとも、我眞心を君に捧ぐる月日の未長く守らせ給へ、

臥床にも入らず坐せし身を柱に寄せて、殷々と撞き出す除夜の鐘の音、百八を數へ盡せし後、猶更の物思ひに打沈みて名畫の抜け出でたるが如き風情、惜しや見るものなく、ただ番町の夢に入れば入るべし、

一夜あけて正月元旦、いかなる疎遠の間も訪ひ訪はるゝ世の中に、身を潛めて人と交はらねば絶えて年賀の客もなく、たゞ形ばかりの門松に心ばかりの春を迎へしのみ、ヒツそりとせる二階に其日は暮れて、電燈の光り障子越に庭の冬木を漏るゝ頃、飄然と入り來りしは松川廣行、飲炊婆と小婢にも今日は改まりし挨拶をうけて、其身も流石に平常とは違ひしシルクハットに燕尾服、  
「目出たいね、相變らず頼むよ」

其まゝ二階へ上れば、聲に座を起ち今しも迎へ降りむとせしキタ女、中腰に差控へながら片手を帽を受取り、あとに續いて座敷に入りぬ、  
見れば多少の亂れに風情を添ふる束髪でなく、まッ黒に艶々しき大丸鬘、なほさら雪の額と青味が、りし首筋に冴え渡り、白襟白無垢の下著に黒羽二重の五



ツ紋、わざと帯は金を嫌うて銀襦の厚板、いつにない薄化粧ます〜天生の眼鼻を晴れ立たせ、たゞさへ自然に備はりし品位を純日本式に盛粧せる風情、しつとりとして優美に氣高く、思ひは胸に餘れど言葉は尠し、

「お目出たう存じます」

「や、お目出たう、なるほど、お正月だね、まるで今日は見かはす様だ、あゝ立派立派、どこへ出しても恥かしくない、自慢の出来る立派な奥様だやはり汝は當世流のハイカラより其方が高尚で宜いよ、しかし、さういふ改まつた真面目な風で、ちやんとして居られると聊か冗談が言ひ憎い、どうしても美人の盛粧した前では自然に敬意を拂はされるやうだね、いはゆる敬愛の語こゝにありだ、はゝゝゝ」

「はゝゝそれが今年中、御冗談の始まりで御坐いませうね、妾の方からも申し上げます、やはり御身分が御身分で争はれません事、さういふ、お服

の方が御立派で御坐います」

「はゝゝ二人で互に譽め合つて居れば無事だ、しかし今日は甚だ無事でなかつた、朝から今まで一日、綱ツ曳の後押で、や、草臥れた、草臥れた、やツと俵を上野で追ひ歸したが、いよゝ殿様は御免だ、うるさくて堪らない、つまり虚禮の操り人形だからねエ、時に屠蘇はあるかい、お祝ひだけは仕て歸らう」

「はい、まねのやうで御坐いますが、お待ち致して居りました」

幾百人の當世女が華奢全盛の競争場裡に押出しても、物質上の代價を論ぜざれば天生の美を以て四邊を拂ふべき今日この盛粧は、そもゝ誰がためぞ、運び出だせし三重は手輕なれど心を籠めし品々、屠蘇の銚子盃、例年の事ながら新しき箸紙に女文字の謹みて、名も得書かず、たゞ御主人様とせるは、いかにも優しく哀れなり、



廣行、その箸紙の文字に目を注いで、ジツと暫し無言のまゝ差俯向さしが、やがて盃を取上げて酌をさせ、グツと乾せしを其まま與へぬ、

「さア今度は乃公が酌だ」

「ありがたう御坐います」

「まづこれで、お正月の氣がしたよ、時に外の日でないからね、すぐ歸らう、あすの晩、ゆつくり來やうね、階下の召使ひ二人に年玉といふものを遣ッて置いてくれよ、乃公からだ、感心に婆も小婢も、よく働くな」

「ほんとうに氣心の、よいものを置き當てまして、どうか長く居らせたい御坐います」

「目をかけてやれ、あゝ揃ッた奴は急に探してもないもんだよ、たしか婆は三年、小さいのは足かけ二年になるね」

「やはり縁で御坐いませう」

「同じ縁でも乃公と汝の縁は年限なしだ、はゝゝゝ友白髮の末まで、ねエ」

鍋釜さへ元日は休むものとして、人は猶更ら早寝の夜に入れば往來の影なき午後八時過ぎ、わけて淋しく凍れる團子阪を、戀なればこそ、

燕尾服を包みし外套の襟を深く立て、幾度か風に危きシルクハットを堅く被り白き我手袋を見るさへ寒くステッキを引ずりながら上り行けば、

「いかゞです旦那、いかゞさまで」

乗る氣もなく見返れば、背後より空俵一臺、襪襦毛布に身を纏めて煤けたる提燈の五十に餘りし老爺、よくくの奴なればこそ、けふの今夜この寒夜この楫棒に取纏りて露命を繋ぐかど、急ぐ身でなく人に見られても恥かし氣のなき廣行、



「おい、乗ッてやらうか」

「有難う御坐います、どうか旦那」

「ちと遠いぞ、麴町の六番町までだ、行けるかい」

「まゐります、三十五錢だけ」

「よし、走るに及ばないぞ、かまはないからね、ゆるゆるとやれ、一圓くれる」

おろくくと喜んで楫棒を下せば、かゝる事まで人目には好奇心の悪戯と見らるゝ、廣行、いづれヨボくは承知の上、曳かれながら車夫に話しを仕かけらるゝも承知の上なり、

「いくら遅くツても宜いぞ」

果して走る車夫でなく歩く車夫、わざと廣行より話しを仕かけぬ、  
「年を取ッて、かういふ事は辛いだらうな」

「仕方ア御坐いませんよ」

「どこに住んでる」

「追分の裏横町で」

「さうか、幾歳になる」

「もう、いけません、五十四で、いや今日から五十五です」

「は、は、けふ一日で四と五の違ひだな、いづれ妻子はあるだらうな」

「獨身者で御坐います」

「は、ア獨身者か、白晝も稼ぎに出るかね」

「これですから逆も市中で白晝、お客は御坐いませんよ、當節は血氣な若いものばかりで第一に俾も前掛も實のところ旦那、これちやア無効です、かういふ晩ですから場所を變へて出ましたが、おかげさまで助かります」  
「おい、危いせ」



「へエ、しかし旦那お見上げ申せば私どもの俵へ、お召になる方ぢやア御坐いませんね、此方も始めてとすが旦那の方も、始めてで御坐いませう」

「は、は、平均、日に幾何ぐらい取れる」  
「さうですなエ、平常は端々の田舎道で稼ぐんですから、まア平均の四五十錢にでもなりやア大平樂ですが」

「ふ、ン、日に四五十錢づゝで安樂か、ぢやア今夜の一圓はまうけものだな」  
「お世辭ぢやア御坐いませんが旦那、神様をお乗せ申したも同じこつてすよ」  
「や、面白い事をいふね、は、は、は、」

三日の午後、また綱曳の俵を途中に乗り捨て、初音町の二階に禮服の羽織も袴も取りし廣行、こゝには別に仕立置の小袖を其上より重ねて、桐の大火鉢を抱

きながら相變らず床柱に脊を寄せぬ、

キタ女の大丸鬘は其まゝなれど、今日は縞の小袖に色襟を見せて、黒縮緬の綿入羽織に小柳縹子の帯、わざとならぬところに一入の風情を添へ、いづれにしても美人いよゝ美なり、

「昨日は例年の通り朝から舊藩のものに年賀を受けるといふ面倒な日だね、加之も父が風邪の引籠りで、乃公が代理と來たから實に閉口したよ、また今日は元日の廻り残りをやらされて、いやはや蒼蠅いこつた、しかし正月の役目は兎も角まづこれで済んだから、もう宜い、また元の乃公だ、元の乃公どころか、いよゝ近いうちに此家の養子だせ、は、は、は、」

「をり、さういふ事を伺ひますが、眞實なので御坐いますか、養子なぞは御冗談として」

「眞實だよ、おそくも二月中には何とか、方が付くだらう」



「もし、いよ／＼それが眞實と致しますれば妾どう申し上げて、よいので御坐いませう」

「どう申し上げなくとも、さうですかと申し下げれば宜いよ、それが嫌なら黙ッて居るさ、時に元日こゝから歸途に、ふと乗つた辻傳を引ッくりかへされてね」

「おや、どうか遊ばしまして」

「なアに、どうもしない、怪俄はないがね、トンだ傳に乗つたせ」

「さういふ貴君、辻傳なんか、お乗り遊ばすからですよ、おいやでも電車の方が」

「實は乗る氣もなかつたのさ、しかし團子阪を上るとね、正月の元日だもの、牛馬も休んでるに空傳を曳いて、よぼよぼした老爺が頻に勧めるからかはいさうだと思ッて乗つた、ところが果して晝間この市中で稼ぐ車夫ぢ

やアないさうだが、寧ろ面白半分、乃公も傳の上から談話をしながらね」  
「あら、まア貴君いくら、夜分でも、あまり外聞が悪いでは御坐いませんか  
第一あの寒いに、お風邪でも召したら、どうなさいますの」

「いや、實は寒かつたよ、上と下で談話しながら汝、のろのろ挽き出すんだらう、自分で歩くよりも、よほど寒かつたね、ぶる／＼震へた、は／＼、おまけに千駄木を横ぎッて本郷の通りから弓町を斜に水道橋へ出ようとする時、石にでも躓いたものか、ひよろ／＼としたが一所懸命だね、しツかり楯棒を握つたまゝ放さずに行儀よく坐ッて仕舞つたのは呵しいぢやないか、しかし乗ッて居た乃公は堪らない、不意を食ッて前へ抛り出されたよ提燈の火は消える帽子は飛ぶね、は／＼すると其處へ通りかゝつた巡査が駈けて来て、乃公には親切だつたが車夫に對しては頗る嚴格だ、大に叱り付けて鑑札を見ると、鑑札の年齢と本人の年齢が大變に違ッて居てね、



つまり三十何歳とかいふ他人のものを借りて来たのだ」

「まア、とんだ俵に召しました事」

「さうでなくとも今日、きけば四十五歳以上は許さないんださうだ、ところへ一見して五十六だから無効だ、重ね重ね立派な反則だ、すぐに連れて行くといふ面倒で、乃公も仕方なく名刺を出してね」

「わざわざ何も御名刺なんか、何故、さういふ時に貴君お出し遊ばすんですよ」

「なアに構はない、ぼろ俵に乘らうが荷車に乘らうが決してかまはない、乃公の流儀だ、兎も角も二圓、車夫に遣つて置いたがね、もし其以上の罰金でも取られちやア、ふびんだから名刺を巡査に渡して、その事をいふと巡査どの急に敬意を表したが、やはり反則は反則として連れて往つたよ」

「でも、お怪儀のなかつたのは、何よりで御坐います、定めし車夫も喜んで居りましたらう」

「かはいさうに、拜んで居たよ、まさか罪を犯してまで、俵を曳きたくはな  
いだらうにねエ、時に汝、よく聞いた事あるが、汝の伯父で小川、何とか  
いふ人間があつたね、そら汝を五歳の暮まで育てたとかいふ伯父だよ」  
談話の順序を破りて、あまりの不意にキタ女は眉を顰めながら、いきくと張  
り切りし眼許に廣行の顔を打守れば、ふと俄に思ひ出せるが如く、

「むゝさうだ、小川庄藏といふんだつたね」

「はい、それが」

「それがね、ふしぎだ、いかにも不思議だ、その車夫が巡査に叱られてね、  
鑑札と違つた本名を白状した時、小川庄藏というたよ」

「えッ、小川、庄藏と」

「さうだ、小川庄藏だ、もしあれを汝の伯父とすれば、まるで小説だね、小



説も小説、ふるい舊式にある小説だ、しかし事實は寧ろ小説よりも奇なる  
もので、或は汝、さうかも知れないぜ」

懐しさよりも、たゞ恥しさ、悲しさ、胸は驚愕に打たれて針を刺さるゝ心地、  
せぐり來る眼に涙の保つ筈なし、

「まア、何といふ、なさない事で御坐いませう、伯父も元は、相應の、商  
人で、居りました筈ですが」

「それが人生の浮沈といふもんだ、仕方がないよ、車夫になれば車夫で、も  
し乞食になれば乞食だ、陰ながら助けてやれば宜い、たとへ其伯父が百萬  
の財産家になつて居ても、汝に對する乃公は同じこつた、恥づる事も泣く  
事もないぞ」

「それに、いたしても、あまり」  
「なアに、かまはない、しかしさ、をの俵に乃公が乗るとはふしぎだね、加

之も無事に更いて行けば、わかる筈のないものを途中で過誤のため巡查の  
手から知れるとは、殆ど組み立てた演劇にでもありさうだ、兩親のない汝  
を、あの伯父が五歳まで育て、他へ養女にやつたんだね」

「はい、養女に、やられましたのが、いつも、お話し致します遠州流の生花  
の師匠で、子供心によく覚えて居ります、養父母とも大變に妾を、かは  
いがつてくれました人で、その節は伯父も、相應に暮らして居りましたか  
ら、をりく手土産などを持ってまゐりましたが、妾が九歳の時、どう  
いふ都合か急に一家を擧げて廣島へ、それが伯父と別れました最後で、せ  
めて十二三にでもなつて居りますれば、いろく兩親の事も、聞いて置  
きましたらうに、何分まだ九歳で、それだけが二十六の今日まで、ざゞ殘  
念に、存じて居ります、かやうな、不束な女を、かう仕て戴くに付けて猶  
更、もし、もし兩親が、どツかに居りますれば嘸、さぞ喜ぶ事で御坐いま



せうと、思ひまして」

「不運なもんだよ、ねエ」

「全く、不運に生れましたもので、その後また養父も養母も引續いて、なくなりましたのが十二の時御坐いますもの、まだ不運の果し切れないのは、當然と存じます、聊かの財物がありますのと、妾を欲しがりますには、なるほど後に思ひ當りました先が、養父の従妹で、御承知の」

「わかッてる、その以後は本人の汝より、よく承知してるといはなければならぬ乃公だ、つまり多少の財物よりも實は汝を第一の目的に欲しくッて引取ッたんだからねエ、どうしても自然の結果、あゝいふ事になる筈だよしかし、あゝいふ面倒な中から汝を救ひ出すには随分、馬鹿な骨が折れたせ、十九から二十三まで五年の間、乃公が教育監督者となつて一所懸命に汝を仕込んだよりも、あの時の前後三月ばかりの方が、よほど骨が折れた」

ね、はゝゝゝいは、自分の勝手に苦勞したやうなものだがね、時に伯父の一件だ、兎も角こゝ三四日、乃公に任して置け、なほ十分に取調べて、何とか仕よう、常に汝が生涯の悲歎にして居た兩親の事も、いよゝゝわかる筈になつたんだから寧ろ宜いぢやアないか、正月の三日、猶更ら目出た

夢うつゝに夜を明かして待ちに待ちし五日の朝、廣行の入り來りし姿を見るや否、はや眼に涙を浮べて、

「いかゞで、御坐いました」

「無効だいろとゝと調べて見た結果、やはり無効だ、うまく小説や演劇の筋書通りに行かないよ、小川庄藏といふ名は名だがね、はゝゝゝありやア



深川ふかがはに生うまれた大工たいくあがりで、五年ごねん前に死しんだ婦かみアは新宿しんじゆくの女郎ぢやうらう上あがりで、兄弟けいだいの子こは勿論もちろん猫ねこの子こ一疋びきも養やしなつた事ことはないさうだ、はゝゝゝなアンのことたつまらない、馬鹿ばか馬鹿ばかしい、よけいな心配しんぱいと手敷てすうをかけをったわい」

「あら、まア」

「いくら汝おまへ、あらまアでも仕様しやうがないよ、人間にんげんが違ちがつてるんだからねエ」

「でも貴君あなた、何故なぜ、あんな俵くまに召めしたんですよウ、それも無事ぶじで御坐ございませうか、途中ちゆうちゆうでひっくりかへされたり、その上うへいろく御心配ごしんぱいあそばしてさ妻わたくしだつてろくく、夜よも寝ねないで泣ないて居をりましたよ、お手てを入れて御覽らんあそばせ、この胸むねが痛いたア、堅かたくなつて居をります」

「だつて乃公おれは知らないよ、たゞ小川庄藏おがはしやうざうといふ彼奴あいつの名なが悪いんだ、乃公おれは高い俵くま賃ちんを拂はつて寒さむい目に逢あつて途中ちゆうちゆうで投なり出だされて、さんざ汝おまへに泣なかれた上うへまた手敷てすうをかけて調しらべあげた結果けつぐわ、また汝おまへに不足ふそくをいはれるんだ、

はゝゝゝしかし世よの中なかは面白おもしろいね、例れいの三行ぎやう廣くわう告こくで悪戯いたづらに汝おまへの名なを出だした時は、實際じつさいの本人ほんじんに逢あひながら新聞屋先生しんぶんやせんせい、さうとは思おもはないでさ、今こん度どこの乃公おれと汝おまへが、いよゝゝさうと思おもつた奴やつが案外あんぐわい、まるで人違ひじやうひだ、つまり罰ばつが中あたつたんだせ、はゝゝゝ」

「もう貴君あなた、今後こんごこれに懲こりて辻傳つじでんなんかへ乗のらないやう、遊あそばせ」

「なアに辻傳つじでんだつて宜いいがね、あゝいふ寒さむい夜ばん、あゝいふ怪あやしい老翁おやぢの、ぼろ俵ぐるまは止とさう、はゝゝゝ」

「何なんでも貴君あなた、物事ものごとを笑わらつて居からつしやるからですよ、妾めかけ、どんなに泣なきましたか」

「ちやア汝おまへ、泣なき料れうを幾いくらか彼奴あいつに遣やれよ、人ひとは違ちがつても名なは同おなじだ、やはり他人たにんのうちではないせ、はゝゝゝ」

「また、貴君あなた」



「また、貴君」

「また貴君は、ごツちだ、冗談の方か、笑ツた方か、ちよいと妙に光ツた今の眼は、兩方は五分五分に怒ツたらしいね、しかし怒ツた時は笑ツた時よりも情があツて、いはゆる明眸の極だ」

いかに身を謹めど女なり、この一言に聊か抛ねて鄰室へ入りしが、ころりと手枕の廣行を巖戸隠れのまゝに捨て、得置かず、戀は手刀雄の命よりも強く、そツと我から襖の隙見に無言の夜著と枕とを持ち出でぬ、

「入らない、入らない、寝るンぢやアない、草臥れたから横になるンだ」  
まだ無言のまゝ枕を首に差入れ夜著を身に打著せ、裾邊を軽く叩けば、鎌首を持ち上げて、

「かうなれば汝、ほんたうに寝て仕舞ふせ」  
横に向いて幽に小さく低き聲、

「お風は辻傳の上で、お引き遊ばせ」  
すぼりと夜著を頭上に被りながら、  
「御免ください」

其 十三

本所割下水の鬼幸が門口に一臺の自用車、磨き立てたる護謨輪の定紋付なれど心あるものゝ眼には火の車なり、  
火の車に乗りて鬼の棲家に行けば、いづれ極樂の筈なく、これが地獄の表門、ひとごころしは固より木戸幸四郎の家業と知りながら、  
今日の客は法學士と辯護士を名刺の割書にして田島といへる三十五六の當世男法廷に立ち世間に出で、は天晴の才物なれど、金が物いふ鬼幸の前には頗る閉



口頼首の體

「木戸さん、今いふ通り勝敗に關せず千五百圓の報酬になる事件があるンです。すからね、つまり前後千圓にして、どうか三百だけ、願ひたいもんだ」

「いくら、うまい事件があつても事件は其方の事件で、此方は無効ですよ、前の溝を浚つて來りやア兎に角、あの七百圓を其まゝにして、また三百圓の追貸は追喧嘩の原因で迎も田島さん、いけませんな、お互に時間潰しだ前の七百圓だつて先月分の利息まだ貰ひませんせ」

「そりやア、わかつてる、わかつてるが木戸さん今度が始めてだらう、二年以來、幾度となく借りたが、まだ利息を滞らした事はない筈だ」

「ない筈でも現に一度あれば、催促しますよ、また利息の滞らないのは當然の約束で自慢にやアなりませんせ、もし外の相手なら田島さん、たゞの一度だつて承知するもんですか、そこは辯護士といふ肩書に免じて、人の

權利義務を取扱ふ商賣だから、まさか間違はなからうと却つて大丈夫に思つてるからですよ、ところで今日の三百圓は無効だ、いけませんね」

「いけないところを何とか、特別に、出來ないでせうか」

「出來ないものは田島さん、はつきりと出來ませんよ、何とかするといふやうな曖昧な事ア金銭上の禁物です、金貸に特別はありません、はゝゝゝそれとも田島さん、別口なら御相談しませう」

「別口で結構、なるほど前後一口に仕ちやア物の極りが付きますまいね、前の七百圓は七百圓として、別に三百圓」

「いや田島さん、さういふ別口でない、誰か別に三百圓の連帶者があればとゝふんです、失禮だが外の事と違つて田島さんには五百圓が極度ですよ、あの七百圓も實は二百圓の貸越です」

「酷い事を」



「どうせ酷くないとは、いはれない家業でさア、は、は、は、しかし田島さん是非とも三百圓、入るとすれば誰が目ツけなさい、随分と廣い交際だから、誰かあるでせう、相手次第で金は出します、千でも二千でも、は、は、は、萬金も驚きませんよ」

「いくら交際は廣くツても、こればかりはね、寧ろ交際を破る談話だ、おいよしといふ奴ア如才なく先で探してるからね、は、は、は、しかし待てよ、實は木戸さん、ごえらいのが一人、ある事はあるが、ちと大き過ぎる」

「大きいのは田島さん、いくら大きくツても宜うがすよ、相手に依ッちやア前の七百圓も背負はせるさ、同じ人間で前後一口にする事ア嫌ですが、別に乗替の大きい奴へ一口に纏めるのは此方で望みます、全體どういふ相手です」

「華族さ」

「華族、ごこの華族です」

「こりやア僕と同じ級から出た華族で、身分が違ッてるから其後は暫く會はないがね、よほど殿様放れがして萬事に捌けた人間だから、たッて頼めば何とか、なるだらう、いけないといへば三百圓も、いけないが、ランといやア三四千圓、たしかだな、右とか左とか、元來さういふ人間だ」

「何といふ華族です」

「松川、子爵中の財産家だ、松川子爵の相續人で廣行といふんだ」

「え、松川、廣行」

「知ッてますか」

「し、知ッてるの、知らないのッて田島さん、ありやア無効だ、まッびら御免を蒙らう」

「なせ、なせ無効です」



「なせッて、松川廣行、や、とんでもない、華族も華族あゝいふ華族があるからね、油断も隙もならない世の中だ、實ア田島さん、去年の暮、加之も大晦日の五日前ですせ、彼奴のため酷い目に逢った、ふざけるにも程度があつて冗談に念の入つた凄いい悪戯をする奴だ、つくづく後で考へると、私を新聞廣告の黒枠に入れたのも、證據はないが彼奴の業かア知れない、何の怨恨あつて、あんな事を仕やアがるんだか、ありやア田島さん、あゝいふ氣違ですかね」

「はてね」

「はてねと首を捻つたぐらゐで、諦めの付く生優しい奴ぢやアない、物事に順序があるだけ猶更ら癪に障る奴だ、わざわざ二度も眞面目な面で遣つて来てさ、是非とも年内に五千圓といふから、こいつ占めた、好い青首が掛つたと思つてね、目の廻るやうな忙しい中を約束の日に屋敷へ出かけた、

ところが田島さん、まんまと首尾よく一ぱい食つたんだよ、委しく話せば腹が立ッて堪らないから、その以上お話しは出来ないがね、あゝいふ太い野郎が華族にあるから恐ろしい、この木戸幸四郎この年になるまで、あんな馬鹿馬鹿しい目に逢つて、あんな猫ッ被りに出喰はした事アない、畜生、何とか腹癒をしたいと思いますと思つてるところだ、幸ひ田島さん、學校友達なら一番、うまく説き付けなさい、私の名をいはないで五六千圓、ちよいと軽く約束手形の裏書さすんだ、よろしいかね、あとは萬事萬端、此方の工夫にあるから、哀れッばく泣き付いて御覽なさら」

「だがね、さう残酷にもやれないさ、しかし酷い目に逢つたもんだ、無論ありやア學校時代から、をり／＼人を馬鹿にして思ひ切つた悪戯をする人間だツたよ一高に居る時、葉巻の中へマッチの粉を詰め込んで或奴の顔中へ火傷をさした事もあつたね、つい華族といふ肩書で誰しも油断するからね、



僕わたくしなんかも現げんに料理屋れうりやで、さんざ禮れいをいはされた結句あひくに置去おきざりを食くって困こまった事ことがあるよ、はゝゝゝ」

「でせうな、其そのくらの事ことは平氣へいきにやる奴やつだ、しかし食くへないところがあり  
ますせ、よほど巧うまく説せつき付つけないと、術てに乗のるまゝ」

「乗のる乗のらないより考かんへて見みると少々せうしょう、忍しのびないな、聊いさか疚やましいね」

「ぢやア田島たじまさん、お止としなさい、わざわざ田島たじまさんの手てを借かりなくつても  
この木戸きどが睨にらんだ以上いじやういづれ、どツかどで無事ぶじには置おきませんよ」

「いッそ、やらうか、それがため首くびを締くる相手あひてでもなし、實じつは外ほかにも近頃ちかごろ、  
ちよいと妙めうな事ことを聞き込こんで、奢おごらしに押掛おしかけやうと思おもつてる時ときだから、  
なアに僕わたくしの知しつてる新聞記者しんぶんきしやで、松川まつかはの外妾あかかけを探さがり當あてたものがあるのさ  
はゝゝゝさういふ弱點じやくてんは握にぎつてるし、やつて見みよう、やらう」

「やりなさい、やりなさい、いくら深ふかく引摺ひきずり込こんでも、いたゞしくない

相手あひてだ、あゝいふ相手あひてを友達ともだちに持もつて、今いままで無事ぶじに見遣みのがすとは、田島たじま  
ンも腕うでがないよ、腕うでのないのも宜いいが金かねのないのは田島たじまさん、さし當あたつて  
どうにもかうにも困こまるでせう、三百圓さんひゃくえんで困こまる時ときは其その三百圓さんひゃくえんが出來できても困こま  
時ときだ、まづ金かねといふ奴やつは尠すくなくとも當座たうざに迫せまつた三倍さんばい以上いじやうを手てに入いれないと  
樂らくになりませぬね、どうです、この際さいに五六千圓ごふせんえん、うんと摺つめば摺つめる  
ぢちやアありませんか、あれの裏書うらがきで、それがため首くびを締くる相手あひてでもない  
と承知しやうちしながら、やらないのは嘘うそですよ、おやんなさい、やれば遣やれるん  
だ」

二月三日ふたつきつつか、松川家まつかはけの應接所おうせつじよに相對あひたいせしは、例れいに依よつて例れいの如ごとく何事なにことにも平氣へいきの廣ひろ  
行ゆきと、満面まんめんの微笑ゑんみに野心やしんを包つめる田島辯護士たじまべんごし、



「やア暫く、毎年の同窓會にも缺席ばかりで済みません、しかし御成功でせう、よほど田島君も近來、肥られたやうだ、相變らず飲むと見えませぬ」  
「いやもう、飲めませぬな、あの時代は飲むでなく無理に酒を注ぎ込んだので、いよゝゝ社會へ出て見ると飲むよりも食ひ兼ねるくらいです、はゝゝしかし御壯健で」

「いはゆる馬鹿避者で、我ながら身體の仕末に持て餘して居ますよ、また君、今だに老父の脛ツ噛りさ」

「しかし我々と違つて、生活問題のない御身分だから實に羨ましい、人間もパンのために働くやうちやア無効ですよ、随分あの當時、いろんな豪傑も學者も居ましたが、さて世の中の試験に逢つて満足な奴は一人もない、いづれも案外の平々凡々、ならまだ好い部で、中には生活と戦はずに餓死と戦つてゐる奴がありますよ、もし負けりやア直に生命がないといふ騒ぎで、

はゝゝゝ」

「だが君、そこが人生の最も面白い最も趣味のある點だよ、僕の如きは或意味に於て一種の寄生蟲だからね、實は大に恥づべき境遇さ、今に何とか、せなければならぬと思つてゐる最中だ」

「願はくば最中になりたいもんです、いづれも皆これ最後ばかりで、事々物々の窮極、壁に馬を乗り掛けたといふは多少まだ勢ひあれど、盲目が路次裏へ突き當つた如く、もはや一步も進めないのが多いんですからねエ」

「はゝゝゝしかし乗り掛けた壁は突き破れないにも限らず、また行き止りの路次にも意外の抜け裏があるもんだ、やはり乗り人と杖の探りやうにあるでせう、いけなければ平氣に遠慮なく、ぐづぐづせず、さつさと引返すだけのこつた、さう世の中は人間を窘めるために出來て居まいと思はれるつまり考へ次第さ」



「ところが實際に窮すると、杖も考へも引返す餘裕も工夫もなくなりますます甚だ意氣地のないこッですが現在こゝに一人、それがため今日、久しぶりの御無沙汰を謝し旁、伺った次第ですが」

「はゝア、他人の事と思つて聞いて居たら、君の事ですか、無職業なら兎も角、既に辯護士といふ立派な高等職業を以て社會の表面に活動する君が、はゝゝゝ冗談だらう、はゝゝゝ」

「いや、全く、實際、どうにもならない事が四方八方から一時に重ッて来て残念ながら奈何せん事實は事實です、一面また高等職業なるが故に猶更ら世間へ對しての體面上、いよゝゝ苦痛の多い理由で、殆ど進退こゝに谷ッて出ましたが、何とか、御救濟を願へますまいか、その後は境遇の相違で自然御無沙汰にもなつて居ますが、學校時代の朋友一人を助けると思つて」  
「助けるといふ事は失敬の意味ですが、どうすれば宜いんですね、どう仕る

といふんです、いくら同情を寄せるにしても到底、出来ない事は出来ませ  
ンせ」

「無論、出来ない事は願ひません、つまり一時、ちよいと、お名前を拜借す  
れば」

「名前、僕の名前が、どうなるんです」

「實は去年の春、民事上の原告側で或事件を引受けましたところ、その事件  
が頗る面白い見込のある大事件で、尠くも六七萬は確に取れる筈ですが、  
何分、始めッから訟訴費用の一文もない依頼者で、丸一年間に大小六口で  
凡そ三千圓ばかり、苦しい中から無理に借金して立替へたのが近來、一時  
に迫ッて來て、つまり裁判確定の時日が豫期以上に延びた結果で、事件の  
見込は其後ますます、確實に有望です、ところが依頼者の方にも亦、別に舊  
債三千圓ばかりで非常の急場に迫つた結果、相互の便宜上この訴訟事件一



切の権利譲渡を、考へれば實に安いもンですな、わずか四千五百圓に買受ける契約を仕ましたが、さて今いふ通りの始末で、三四個月、遅くも半歳の後には六七萬圓の確實な収入ありながら、目下この金のため殆ど四面楚歌の包圍攻撃に苦しんでる理由です」

「なるほど半歳の後に六七萬圓も取れる的がありながら、わづか四五千圓の金で苦しむとは、惜しいよりも寧ろ残念でせう、たつた四五千圓でね、目的の十分一にも足りない金だ」

「實に残念です、つい鼻の頭に都が見えて居て足が届かないといふ理由ですから」

「なるほど、そこで僕の名を全體、どういふ工合に入用ですな」

「甚だ恐縮ですが、一時、全く一時です、たゞ一時、ちよいと、手形の裏書を」

「手形の裏書、何でもないこつた、いかにも易いこつたが君、僕の裏書ぢやア迎も世間へ通るまい」

「通りますとも、立派に通ります」

「いや、通る筈がない、僕は松川家の戸主でもなく、また別に僕の財産といふものがないから従つて債務履行に對する信用のあるべき筈がな」

「現在に於ける財産の有無は兎も角、きつと通ります、必ず立派に通りますから是非、無論また御迷惑をかける筈もなし、たゞ一時お名前を拜借するだけの事だ」

「その名前が君、無効だよ」

「ぢやア無効として一時お貸し下さ」

「は、ア、わかッた、君は僕を、やはり華族の相續人と思つてるんだな、つまり子爵を嗣ぐべき廣行と思つてるからだらう、そりやア君、今までの廣



行だ、實は明日、いよいよ親族會議で廢嫡になる僕だよ、僕また更に一點の異議もなく、すぐに裁判所の手續きを受ける覺悟さ、ははは、君も運の悪い男だね、せめて一月か二月前に来りやア、まだ廢嫡問題の起らない時だから五千や一萬の裏書は、何でもなく通ったかも知れないが、残念至極遅かりし由良之助で判官殿、もう切腹したよ、この家で、この應接所で人に談話するも實は今日、一日の廣行だ、明日からア無資格無資産の九裸一貫、置いてちへくれりやア君の玄關番にでもなるせ、どうです、ゴツかで僕を養ってやらうといふ好奇心の慈善家アなからうか」

流石の田島辯護士、あつと呆れて反身のまゝ暫しの無言、廣行ますく壘みかけて氣焰萬丈、

「しかし君、これからが實際に於ける僕の舞臺だ、なアに華族だの子爵だのと、つまらない俗世界の彩色は却って面白くないよ、男子は須らく赤裸々を以て世に處すべしだ、祖先の餘慶に衣食するなんて、獨立獨行の出來ない病人か不具者に取ってこそ幸福だが、さうでない以上、寧ろ自個の本領を没却せらるゝも同じゴツたからねエ、ところで多年の本望、いよいよこの廣行も人爲的の粧飾一切を破り不自然の境遇を脱して、大に世の中へ飛び出る覺悟さ、考へて見ると愉快で堪らない、骨鳴り肉動くとは君、此こつたらうね、ははは、加之も今日まで四圍の事情に撃せられて遺憾ながら已むを得ず、我ために生涯の妻は妻だが人目には忍ぶ戀とやいふらむで、公然の發表を見合はして居た女も、あらためて結婚式を擧げる筈だ、いづれ君どツか、借屋住居でも極つたら御通知するから、をりゝ遊びに来て下さい、不出來ながら妻の手料理で一獻さし上げやう、ははは、しかし君、わざゝ久しぶりの訪問をうけて折角の手形に裏書の效能ないのは、實に氣の毒でしたな」



同じ謝絶を食ふにしても、始めより木で鼻を括りし挨拶は寧ろ諦め易けれど、首尾よく十中の八九まで漕ぎ付けて、いよ／＼といふ最後に入念の謝絶を食はされ、加之も其上に入らざる氣焰を吐かれ、のろけまで浴せられし田島辯護士ぐうの音も出ず其まゝ呆れて驚いて遁げ歸りぬ、遁げ歸りて例の鬼幸と顔を見合はせし時は、定めて晝にも描けざる面と面、但し後の三百圓は空になりて前の七百圓ます／＼嚴重の催足、無論の事、

其十四

いよ／＼親族會議の結果、その以前に父の廣道も老眼に涙を含んで承知の上、廢嫡に付いて裁判所の手續き済むまでの間、本人の廣行は青山なる西田伯の屋敷へ引取られぬ、

西田家の三太夫以下お家大事の五六人、火の玉の舞ひ込みしが如く、おもはず眉を擡め額を鳩めての内談、

「裁判の確定まで實際、どのくらゐの時日が掛るでせう、外ならん御親戚の間柄、相濟まぬ事ながら一日も早く、御退去を願ひたいもんですなア」

「さやう、お客様も、お客様で、あゝいふ御來客は當家に於て甚だ迷惑ですよ」

「たゞ迷惑で濟めは宜しいが、御自分のお屋敷へ面白半分に高利貸を呼び込んで喧嘩なさる方ですからな、うか／＼出来ませんで」

「いや、あまり目立ッた用心いたしては却ッて宜しく御座いますまい、あゝいふ御性分の方は、ごうかすると物事を逆にと取ッて、意地に出られますから」

「なるべく御前と、お近しくなさらないうやう、我々に於て當分お隔て申し上



げるより致し方は御座いますまいな」

「ところが、どういふものか御前とは従来から、よほご雙方お氣が合つて居られるやうで、この際は別して困りますよ、現に先刻も、ちよいと伺ひたい事があつて御座敷へ出ると、お二方とも何か頻に御密談の最中で、其まゝ引退りましたが、實は當家の御前も随分お氣輕に物事を、お引受け遊ばす方だから、あゝいふお客様は最も禁物と申さねばなりません」

「それに第一、今までは絶えず夜も晝も蝗のやうに飛び出されたといふ方が當家へ來られて以來、却つて御自由の身を少しも外出なされず、朝夕妙に御前と睦じくせらるゝ點が頗る怪しう御座いますぞ」

一町四面に足らぬ屋敷の内を天地として、塀の外に世間のある事を知らざる人々が、頻に膝を交へ聲を潜めて心配の眞最中、にゆつと不意に顔を出せしは廣行、

「やア皆、さう急に改まつちやア困る、食客だよ、食客だよ、客の分際で甚だ濟まないが自働車を一臺、かり入れて貰ひたい」

「は、は、承知いたしました、いづれへ」

「あまり退屈だからね、今日は主人公を誘ひ出して横濱の先の杉田へ梅でも見に行かうと思つてる、しかし事に依れば、それから三四日どこへ行くかわからない、まア出かけた先方でのこつた、兎も角も自働車は杉田までだ」

たゞ一場の座談にも耳を傾け目を圓くして驚く連中、その主人公を誘ひ出して三四日の行方不明と聞くや否、いづれも一時に青くなりぬ、

「は、で御座いますすが、は、いえ何、すぐに自働車は呼びますので、誰か電話を、しかし今日のところは、どうか、御一人で」

「折角の梅見に一人では面白くないよ、是非とも主人公を引張り出すんだ、無理にでも誘ひ出す、なアに三四日で歸つて来るよ、遅くとも一週間はか



「ならない、間違つて十日と見れば宜からう、気が向けば京阪地方を廻つて  
月が瀬の梅も見て来る」

「で御坐いますが」

「御坐いまして御坐いませんでも宜いぢやアないか、主人公も既に其覺悟  
で、もはや用意して居られるからね」

「暫時、甚だ恐れ入りますが、暫時、兎も角も伺つてまゐります」

「おい、おい嘘だよ、は、は、は、嘘だよ、自働車も嘘だ、實は乃公だけの  
用で二三時間、ちよいと出て来るんだからね、俵を一臺」

「へ、は、では、お俵を」

「いや俵も入らない、歩いて行かう」

ふいと其まゝ後も見返らず玄關より飛び出せば、慌てゝ狼狽へて送り出だせし  
三四人、おもはず呆れし顔と顔、

「どうで御坐います、あれですからね、いよゝ以て油断がなりません」

「驚きましたなア、もし我々の相談を、立聞きせられたので、御坐いますま  
いかな」

「何に致せ番町様は、お痛はしい事ですよ、あゝいふ方が御總領で」

青山の両田家を飛び出して、今は猶更ら他に用のない廣行、杉田の梅よりも月  
が瀬の梅よりも清香馥郁の初音町、この十日あまり打絶えて訪はれね身の嘸や  
ど、來かゝる門口を立出でしは例の新聞記者、

「やア」

「これは、よいところで御目にかゝりました、實は番町の、お屋敷へ」  
「居らないから、わざゝこゝへ來られたんですな、わるい穴を知られたが



「兎も角も逆戻り、逆戻り、は、は、は、」  
二階の八疊、主客の間に茶菓を運びしキタ女は、人の前に謹めど、十日あまりを聊か恨めしげの眼許、

「折角お越し下さいましたが、近來は少しも此方へは、と申し上げましたばかりのところ、」

「む、さうか、一歩で行違ひになるとこだったよ、ちよいと汝、外して居な、用があれば呼ぶ」

「は、」

座を避けし花の影に目もやらず、其まゝ火鉢を押して前に進みし廣行、

「さア君、樂に、外ぢやアない、かういふところだ、樂に膝を崩して、時に何か面白い事でもありませんか」

「わざと差控へて其後、お禮にも上りませんが、舊臘は、まことに」

「は、は、は、そんな事は君、どうでも宜い、ありやア却って失敬だったよ」

「どう致しまして、時に少々お耳に入りたい事が」

「は、ア、どういふこつてすな」

「外でも御坐いませんが、鬼幸といふ高利貸を、御存知で」

「や、知ッて居ます、實は去年の暮」

「さ、それで御坐います、どうせ、ろくな事をいふ奴ぢやア御坐いませんが、委しく本人より、は、は、は、實に痛快の極で、ところが、あの鬼幸め、とんでもない事を新聞社へ申し込みまして」

「ごんな事を申し込んで来ましたね、つまり去年の腹いせに何か、彼奴相應の智慧を出して来たんでせう」

「全く、さやうで、無論、新聞社の方でも相手には致しませんが、曾て彼の死亡廣告で騒ぎました節、注文通りの取消文に應じない代り、もし其方に



心當りでもあれば通じて來い其時に力を極めて書いてやらうと、いうたのを楯に今日」

「なるほど、去年の暮の事から、その悪戯者を僕だと言つて來たんですな、や、彼奴としては、いかにも、さう來さうな筈だ、さう來るでせう、は、は、もし外の奴なら、その悪戯者のため現に此方も迷惑した事を話してやりたいくらゐだ、しかし相手が相手だから、こりやア困つた」

「なアに、お困りになる事は御坐いません、馬鹿な事をいふな人を疑ふにも先方を見て考へると、一言の下に斥けましたが、兎も角も一應お耳にだけ第一また彼奴の事ですから今後、どういふ方面から如何なる術で」

「そりやア有難う、しかし例の悪戯者、まだ知れませんかね」

「遺憾ながら目下まだ分りません、よほど大膽で細心に巧みな奴と見えます、なれど到底、現はれずには居りますまい、悪戯の工合が普通の人間で出來

ない、戯悪だけに猶更ら、多少その匂ひがすれば、すぐに却つて知れ易からうと、考へて居ります」

「その點は、大にあるでせう、時に今日、番町の屋敷を訪はれた時、玄關の奴、どう云ひました」

「當分、御不在だと、いはれましたが、此方へ伺つても近來お越にならない御様子で」

「實は青山の親類に居るんですが、いよく近いうちに天下の一平民となつて丸裸のまま社會へ飛び出す覺悟さ、は、は、は、委細また改めて君お話しするからね、社會に出た以上いづれ君なんかの力を借りたい事があるよ、まだ一二度だが君これを縁として今後ますます親密に願ひたい、しかし今日はこれで失敬する、編輯の電話で呼べば出てくれるでせうね、わざわざ鬼幸の御注意ありがたう、しかし僕としては問題にならない、は、は、は、おい



キタ、お歸りだぞ」

人を追ひ出すにも圓轉として玉を轉すが如く、追ひ出さるゝもの首尾よく追ひ出されて頗る満足に一點の遺憾なし、

「此ごろは大變、何か御多用と見えます事、けふで丸々、十日で御坐いますもの」

「別に用はないが、いよゝゝ例の廢嫡問題が極つたからね、こゝ十日ばかり親戚の許で聊か謹慎の體だつたよ、はゝゝよけいな面倒臭い家に生れたから、たゞ出るだけでも骨が折れてね、つまり世間の知らない苦勞するだけ馬鹿馬鹿しいよ、はゝゝゝ」

キタ女は其まゝ差俯いて暫時の無言、嬉しけれど悲しく、悲しけれど嬉しく、

思へば夢にも祈りし心の願望なれど、きけば今更ら胸を刺さるゝ身に辛し

「さア宜いかね、いよゝゝ兼ての約束通り汝の入婿だぞ、昔の川柳に、入婿は去狀を書いて追ひ出され、はゝゝゝまかり間違へば此方から離縁狀を出して、自分が叩き出されるんだな」

「まア、暢氣な事を、よくゝ考へて見ますと、どうせ妾は何か、きつと罰が當るやうに出来て居ります」

「なアに大丈夫、もし罰が當れば乃公の方が大きく當るからね、ついでに汝の分も背負つてやるよ、心配するな、その代り今までと違つて汝、これからア世話女房だせ、かはいさうだが、時には半襟の著物で襷がけも承知かね、かういふ厄介な御亭主を持つた世話女房だせ、うかゝしちやア居れんぞ」

キタ女は思はず我を忘れし片頬の靨



「どうだ、辛抱が出来るか」

「もし、出来ません時は、死んで申譯いたします」

「どっこい、さう手軽に殺して堪るか、白髪の婆になるまで達者に生かして置いて、さんざ浮世の苦勞をさしてやるんだ、ははは、乃公と汝は前世に於て仇敵同士だぜ、逆も満足に話し合つて仲よく離れられないよ、こりやア生涯の共難儀だぜ、その覺悟で居れよ、樂をすと思つちやア無効だよ」

「ははは、まア御念の入りました事」

「いや、これほど念を押して置いて、女といふものは宜い加減だ、しかし入らざる念を押すだけ、乃公の方が弱くなつたかね、そろそろ入婿根性が出て来たわい、ははは」

「何とでも、御勝手に」

「ちやア甚だ勝手だが、これで今日は歸る、ちよいと梅が香を匂ひに来たん

だ、また一週間か十日ばかり来ないよ、しかし今度いよく来る時は、それツきりの居据りで、いよいよこゝを歸らない時だ、歸るに家なし天下たゞ郷あるのみかね、ははは」

其 五

いよく廢嫡の手續きを終りて裁判決定、子爵家の相續人たる松川廣行、こゝに生れし華族の門を出で、赤裸々の一平民となりぬ、

禁治産、無能力者、身體虛弱、その他あらゆる人間の缺點を以て世間普通の廢嫡問題とすれど、廣行は寧ろ華族たり子爵たるを以て殆ど禁治産に等しき境遇とし無能力者と一般の取扱ひせらるゝものとし、これがため身體また竟には虛弱たるべきものとして、さらに廢嫡せられし心なく、實は我より進んで廢華族



を行ひし勢ひ、呵々と一笑に付して去りぬ、  
されど多少その本領を知りて多く言はざりし父の慈愛、涙を以て諫めし弟の廣  
國が最後の人情、わけて親族中の西田伯が餘所ながらの保護者として、廣行の  
ために生活費の基本財産と定めしは有價證券六萬圓、  
富としての六萬圓は固より論ずるに足らねど、今日これを單に三四人の生活費  
とすれば、華奢を好まざる身に何の不自由なく、年々その利子を以て米鹽の顧  
慮なし。

物質上に華奢の念なく利益上に何等の慾望なくして、たゞ無形上の或意味に大  
膽なる細心と驚くべき案外の奇才縦横を抱ける松川廣行が、衣食に窮せず米鹽  
に勞せず係累に煩はされず情實に囚はれず、加之も他に酒食を顧みず赤裸々の  
一貫を以て社會に躍り出でむとす、そもく何物に憚り何物に撃せられて何物  
を恐るべき、世の中の戰場に向うて武者振ひ一番、例の鼻頭に得意の冷笑を浮

べながら、ふん、

三月二日、廣行の身は初音町に移りて、今までは忍ぶ戀路の隠れ家に、をりを  
り心ならずも歸りを急ぎしが、今日よりは餘所の歸りを待たるゝ身、  
松川家は子爵中に第一の富を有し、全華族を通じても恐らく五本の指に數へら  
るゝ動産不動産、その總領に生れて家を嗣ぐべき幸福圓滿の身が、あの女たゞ  
一人のために廢嫡せられしとは、情夫ある藝妓を一萬圓で請出すよりも馬鹿な  
奴との評判、或一部の同族中に起りぬ、

それほどの事、人に教へらるゝ男でなく、それほどの風聞、知らぬ筈なき本人  
の廣行、肱を枕の轉び寢に笑ひながら、金縁の眼鏡を取られて世間が闇となる  
近眼ども、何を吐すぞ、馬車自働車を奪はれて世の中の獨立獨行が出来ぬ蹇ど



も、黙ッて見て居れ、

いかなる場合にも笑ひ、何事を語るにも笑ひ、常に絶えず身を反して高笑ひの廣行も、今夜のキタ女に對うては戀に通ひし今までの人でなし、

「外でもないがね、いよゝからなツた以上、一應あらためて汝に言ッて置く事がある、平生の冗談ぢやアないせ」

「は」

「たとひ十分に承知して居ッても、よく聞いて置けよ、つまり乃公と汝は今更ら同棲したのを以て夫婦の證據とする夫婦でなく、この數年以來、人は何と言ッても、世間の體面上、ごうあらうとも、偽らず飾らず互の心と心に堅く結び合ッて來たんだから、これが實際の戀愛を成就した夫婦で、寧

ろ媒酌人と戸籍面とに結び付けられた夫婦よりは、却ッて誇るに足るべき夫婦であるといふ事を、疚しからぬ心に置いて居らなければ、いかにぞ、決して自慢しろといふ事ではない、もし今までの境遇に置かれた習慣上と、また今日からなツた乃公に對して妙な氣の毒な感情から、をかしく變に居縮んだ遠慮勝の女になツてくれば、寧ろ殘念に思ふからだよ、何物にも憚らず立派に人の妻たる事を自覺しなければ、いけない、あはれは哀れでも繼子根性は見苦しい、今後の汝は戀に通はれた日蔭女でないぞ、世間普通の羨望せる華族も子爵も繁履の如く捨て、顧みざる松川廣行の妻だ、わかッたかね」

「はい、有難う御坐います、よく、わかりまして」

「むゝよし、ところで、も一事、いうて置く事がある、實はね、今度、かうなるに付いて最も乃公の苦しかツたのは、二度までも父が、人しれず乃公



を呼んでな、しみとくと身に沁みた慈愛の御言葉と、陸軍に居る弟が男泣きに泣きながら諫めてくれた事と、この二事は實に苦しかつた、加之も父が御言葉中に、おいキタ、汝の事をいはれたぞ、まだ見ないが餘所ながら聞いて居る、末長く愛してやれと、な、いはれたよ」

キタ女は物も得いはず、たゞ兩眼の涙、ぼろ／＼と滾しぬ、廣行また一雫、

「それのみでない、乃公が母方の親戚で西田といふ伯爵に内談せられてね、六萬圓を生活費に下されたよ、無論これは手を著ける金でなく、資本金として西田家に預けて置くんだが、その利子を年に五分として五六の三千圓月々二百五十圓づゝ送ツてくれる筈だ、二百五十圓は大金でもないが、他日は他日、當分まづ此まゝ下女二人で別に奢らなければ、どうか、かうか、さのみ衣食住に行き詰るほどの差支もなからうから、うるさくて面倒だが汝、今後これ一切、この乃公を米鹽の顧慮ないやうにしてくれ、いふま

でもなく門外一步の乃公は乃公で、いかなる事があるにしろ、其うちの一文も持ち出さない覺悟だ、つまり夫婦二人に下女二人、主従四人が二百五十圓づゝで飢えず凍えず其日を凌いで行けば宜いんだ、しかしキタ、これは乃公が何事も爲さず只、ぼツとした、醉生夢死の人間と見ての勘定だぜ、それ以上は將來の乃公にあるこつた、ごうだい、やれるか」

「は、一家の事だけは、不束ながら妾、きつと」

「よし／＼、これで安心だ、時と餌さへあれば安心して大に飛べるわら」

「月々二百五十圓の内から、百圓づゝお小遣ひに遊ばしても、宜しう御坐います」

「なアに外に出ての乃公に百圓ぐらゐ、あつても無くても同じこつた、但し生活費の百圓は大切だ、さういふ心配は入らない、また其中から貯金なにかするに及ばないぞ、高が限りあつて數の知れた金だ、もし不意の事あれ



ば乃公が外から持つて来るよ、願はくば月給取のやうな生活状態は見せてくれるな、もし金を目的とすれば、金は溜めるもんでない拵へるもんだといふのが乃公の主義だ、人間に預けてある金は、現在たつた六萬圓だが、世の中へ預けてある金は大きいぞ、なか〜大きいぞ」

廣行の性格、六萬圓を資本金として何等かの事業を営むには、その人物あまりに大膽すぎて危険なるよりは寧ろ不足すぎて手も著けざるべし、また月々六萬圓の利子を以て若隱居の如き無意味の生涯を送るには、その人物あまりに覇氣満々として殆ど馬鹿馬鹿しく滑稽なるべし、そも〜六萬圓に對して彼の態度、いかなるべき、たとひ名は生活費の基本財産にもせよ自己の所有物と定まりし以上、たと空しく保管人に睨まれて蟻虻の餌を運ぶが如く、指圖通りの二百五

十圓づゝを有難く神妙に請取る筈なし、いづれ一議論も一理窟も持ち出すべき男とは、その六萬圓を預かりし西田伯の鑑定、實は聊か遁げ腰に心配しながら、實は心に多少の恐れを抱きながら、今後に於ける彼を見るに最も間違ひのない試金石とせり、  
されど本人の廣行は議論もなく理窟もなく、この六萬圓に對して父の慈愛を感じ謝する外に何の思慮を費さざるのみか、始めより問題にするほどの事とは思はず、つまりは西田伯の試金石にかけらるゝ男でなし、たと最愛の妻に向うての一言、これで乃公を餓死さしてくれるなよ、

其十六

二階の八疊を廣行の書齋として、襖越に鄰室の六疊はキタ女の居室、當分こゝ



に應接所の用なく、下には下女二人、上には夫婦たゞ二人、萬事に形式の面倒なる極彩色の家風より脱し來りて、上野の森影に今この閑靜なる浮世の借住居は、のび／＼として五體の骨節までも弛みし心地、長閑けき春の日脚、木々の若葉に傾いて、午後の讀書に飽きし廣行、ころりと其まゝ身を横へながら、

「もう四時を過ぎたせ、大變に落著いてるやうだが、今日の御手料理は何だね、そろ／＼腹が減つて來た、いや開けなくつても宜い、顔を見ると、談話の要領を得ない、銀行の取引も金網の窓越に間違ひは無いさうだ」

「此方も襖越の方が申し下げよう御坐います、今夜だけ、お茶漬に」

「茶漬、はゝア茶漬かね、道理で治まり返つてると思つたよ」

「生憎と今日は、よろしい魚類が御坐いませんから、お茶漬で御辛抱あそばせ、じつとして居らしつて、あまり濃厚なものばかりでは却つて、お身體

の毒で御坐います、たまには良人お茶漬も」

「茶漬といふものは獻立に手数は掛らないが、なか／＼講釋の多いもんだね、はゝゝゝ茶漬、うまからうなア」

「ほゝゝゝお氣に召しませんの」

「いや、結構、茶漬、大に結構だ大に歓迎するよ、今朝この座敷を乃公が掃除したといふ御褒美で、晝飯は刺身と汁の外にフライとコロツケの二品が特別に添へてあつたから、榮枯盛衰の理で今夜は茶漬、なるほど、あゝ茶漬なる哉、全體あの茶漬といふものは頗る禪味を帯びてるね、よほど俗氣を放れてるよ、あれを茶がけと稱せず茶漬といふところに味がある、つまり飯に茶をかけるンでない、暫く飯を茶に漬けて置いて食ふンだらう、冷靜なる頭腦を養ふには茶漬に限るさうだな、茶漬茶漬、今夜ア茶漬を食ふよ、さらに不足はないよ」



「妾の講釋と其お講釋とで、どちらが長う御坐います」

「長短の論に關せず茶漬の前に何か、うまい菓子はないかね」

「お菓子は幸ひ取つて御坐いますが、つい一時間ほど前、さし上げましたばかりですに、また良人、ほゝゝゝそれこそ胃のために宜しう御坐いませぬよ」

「さやうで御坐いますかね、ほゝゝゝ今日は實に乃公の大飢饉だ、その代り明日は豊年らしい、豊年だらうな」

「ほゝゝまるで小兒のやうに、此ごろは食べる事ばかり氣を揉んで居らつしやいますね」

「さうども、當分は寢る事と食ふ事より外に仕事のない人間だ、かういふ時は上戸に生れたかつたね、上戸は酒さへあれば宜いのだが、下戸は何となく、いやしら聞えて損だ」

「いゝえ、御酒を召し上らないのが、どのくらゐ、お身體のためになりますか、其お氣性で、もし召し上れば、きつと一升や二升は」

「なるほど、酒の飲めないのが幸福で、瑕に玉かも知れないねエ」

「瑕に玉、世間で申すのは、玉に瑕では御坐いませぬの」

「なアに瑕に玉さ、世間の諺は玉に瑕だが、乃公は總てが瑕だらけで只この酒を飲まない一點だけが玉になつてるのさ、ほゝゝゝしかし汝、そこで何を仕て居る、もう襖を開けても宜からう、やはり聲ばかりぢやア面白くない花に霞だ、全體、先刻から何を仕てるんだ」

「別段お聞き遊ばさなくつても」

「聞くなといへば猶更ら聞きたら」

不意に手を伸して襖を引開くれば、はつと隠せし袖の端より小遣帳、膝の横に少々の算盤と硯箱、



「や、わるいところを見た、大藏大臣の豫算編製中だ、今夜アお茶漬で結構」

いかに夜は遅くとも、朝は必ず六時前、さらぬも強壯の全身に朱を注ぐまでの冷水摩擦、四合の牛乳に半熟の鶏卵三個とバター焼のパン二切、都下の新聞十三種に爛々たる眼光を射込みし後、ぶらりと家を出で、谷中より上野の邊を二時間の運動、晝飯は最愛の妻が手料理に舌鼓を打ち、午後また二時間を内外の新聞書籍に耽りて木像の如く、この木像一轉して湯殿に入れば、殆ど檻を荒れ廻る狂人の等しく、おツと喚き、あツと叫び、どしんどしんと四股を踏んで、その出で来りし時は、剛敵と組打せるが如くに勞れ果て、葡萄酒二杯、夕飯の膳に向うて後は、夕刊新聞を読み雑誌を見るのみ、加之も其間に滑稽百出、をり

をり飯炊婆を笑はせ小婢に腹をよらせ、ごろりと横に寝轉んで肱を枕の打解けし談笑は、今日の妻に向うても戀に通ひし時と同じ諧謔、まして今の簡易生活には何の不自由なき衣食住、なるほど或意味に於て半病人を殿様の品位ありとせる華族よりは、一家主從四人こゝに楽しく嬉しく面白き境涯なり、されど人しれぬ廣行の心中、さらに楽しく嬉しく面白き點は、他にあり、他にあり、今は只これ羽翼を憩へるのみ、この廣行が隼の小鳥を覘ふが如く、何物をか望んで社會へ飛び出だす時は、果して如何なるべき、それまでの間は例に依て例の如き廣行、夜に入れば相變らず馬鹿げたる調子を張り上げて、

「さア、古いのも新しいのも中古も皆こゝへ来て面白い談話を仕る、何、